

# 源氏物語

浮舟

紫式部

青空文庫



何よりも危ふきものとかねて見し小舟の

中にみづからを置く

(晶子)

ひょうぶきょう  
兵部卿

の宮は美しい人をほのかに御覧になつたあの秋の夕べのことをどうしてもお忘れになることができなかった。たいした貴族の娘ではないらしかつたが婉嬋えんせんとした美貌ぼうぼうの人であつたと、好色な方であつたから、それきり消えるようにいなくなつてしまつたことを残念でたまらぬように思召おぼしめしては、夫人に対しても、

「何でもない恋の遊戯をしようとするくらいのことにもあなたはよく嫉妬しつとする、そんな人とは思わなかつたのに」

こんなふうにお言いになり、怨みうらみをお洩もらしになるおりおり、中の君は苦しくてありのままのことを言つてしまおうとも思わないではなかつたが、妻の一人としての待遇はしてないにもせよ軽々しい情人とは思わずに愛して、世間の目にはつかぬようにと宇治へ隠してある妹の姫君のことを、お話ししても宮の御性情ではそのままにしてお置きにはなれまい、女房にでもそうした関係を結びたくおなりになつた人の所へは無反省にそうした人

の実家へまでもお出かけになるような多情さがありになるのであるから、これはまして相当に月日もたつ今になつても思い込んでお忘れになれない相手であつては、必ず醜い事件をおこしになるであろう、ほかから聞いておしまいになればしかたがない、大将のためにも姫君のためにも不幸になるのを知つておいでになつても、それに遠慮のおできになる方ではないから、そうした場合に姫君が他人でない点で、自分は多く恥を覚えることであろう、何にもせよ自分のあやまりから悪いほうへ運命の進む動機は作るまいと反省して、宮の恋に同情はしながらも姫君の現在の境遇を語ろうとしなかつた。上手じょうずな嘘うそで繕うことはできない性質であつたから、表面は良人おととを恨み、深い嫉妬を内に抱いている世間並みの妻に見られているほかはなかつた。

薫かおるの大将は恋人を信じて逢あうことにあせりもせず、待ち遠に思うであろうと心苦しき思いやりながらも、行動の人目につきやすい大官になつて身では、何かの名目ができななくては行きにくい宇治の道であつた。「恋しくば来ても見よかし千早振る神のいさむる道ならなくに」と抽象的に言われたその道よりもこの道のほうが困難であると言わねばならない。けれどもそのうちに自分は十分にその人をいたわる方法を考へている、宇治へ行つて見る時に覚える憂鬱ゆううつを消すためにその人を置いておきたいと思つたのが最初の考へな

のであるから、しばらく滞留してよい口実を作り、近いうちにゆるりとした気持ちで行つて逢あおう、そうして当分は隠れた妻としておき、彼女の心にも不安を感じさせないようにしてやり、自分のために非難の声が高く起こらないふうにして妻であることを自然に世間へ認めさせるのがよいであろう、にわかにはだれの娘か、いつからというようなことを私議されるのも煩わしく初めの精神と違つてくる、また二条の院の女によおう王に聞かれても、思い出の山莊から、身代わりの人さえ得ればよかつたのであるといふようにつれて出て、昔をもう念頭に置いていないように見えるのも不本意であると思ひ、恋しい心をおさえているのも、例の恋に呑のん気な性質だつたからであろう。しかし京へ迎える家は用意して、忍んで作らせていた。少し心の暇が少なくなつたようであるがなお二条の院の夫人に尽くすことは怠らなかつた。これを知っている女房などは不思議にも思うのであつたが、世の中というものがよくわかつてきた中の君にはこうした薫の誠意が認識できるようになり、これこそ恋した人を死後までも長く忘れない深い愛の例にもすべき志であると哀れを覚えさせられることも少なくないのであつた。世の信望を得ていることも多くて、官位の昇進の目ざましい薫であつたから、宮があまりにも真心のない態度をお見せになつたりする時には、不運な自分である、姉君の心にきめたままにはなつていないで、陰で多くの煩悶はんもん

をせねばならぬ妻になつていと、こんなことも思われた。けれども逢つて話などをする  
ことはもうあまりできないようになっていた。宇治時代と今とはあまりにも年月が隔たり  
過ぎ、どんな情誼じょうぎを結んでゐる二人であるとも知らぬ人は、身分のない人たちの間では  
世話になつた、世話をしたというくらいのことです。いつまでも親しみ合つていて、それが穩  
当に見える、こうした高い貴族の中では例のないことであるなどと誹謗ひぼうするかもしれぬと  
いう遠慮もあり、宮が続いてこの交情に疑いを持つておいでになるのが今になつていよいよ  
煩わしく思われもする心から、自然うとうといふうを見せていくようになったのである  
が、薫のほうではそれにもかかわらず、好意を持ち続けた。宮も多情な御性質がわざわ  
いして情けなく夫人をお思わせになるようなことも時々はまじるが若君がかわいく成長し  
てくるのを御覧になつては、他の人から自分の子は生まれないかもしれぬと思召し、夫人  
を尊重あそばすようになり、隔てのない妻としてはだれよりもお愛しになるため、以前よ  
りは少し物思いをすることの少ない日を中の君は送つていた。

正月の元日の過ぎたあとで宮は二条の院へ来ておいでになつて、歳としの一つ加わつた若君  
をそばへ置き愛しておいでになつた。午ひるごろであるが、小さい童女が緑の薄うす様の手紙の  
大きい形のと、小さい髭籠ひげかごを小松につけたのと、また別の立文たてぶみの手紙とを持ち、むぞ

うさに走つて来て夫人の前へそれを置いた。宮が、

「それはどこからよこしたのか」

とお言いになった。

「宇治から大輔たゆうさんの所に差し上げたいと言ってまいりました使いが、うろろうとしてゐるのを見たものですから、いつものように大輔さんがまた奥様へお目にかけるお手紙だろ  
うと思ひまして、私、受け取つてまいりました」

せかせかと早口で申した。

「この籠はくは金の箔はくで塗つた籠でございますね、松もほんとうのものらしくできた杖ですわ  
うれしそうな顔で言うのを御覧になつて、宮もお笑いになり、

「では私もどんなによくできているかを見よう」

と言ひ、受け取ろうとあそばされたのを、夫人は困つたことと思ひ、

「手紙だけは大輔の所へ持つてお行き」

こういう顔が少し赤くなつていたのを宮はお見とがめになり、大將がさりげなくして送  
つて来た文ふみなのであろうか、宇治と言わせて来たのもその人の考えつきそうなのである  
と、こんな想像をあそばして、手紙を童女から御自身の手へお取りになつた。さすがにそ

れであつたならどんなことになるう、夫人はどんなに恥じて苦しがるであろうとお思ひになつたと躊躇ちゆうちよもされるのであつて、

「あけて私が読みますよ。恨みますか、あなたは」

とお言ひになると、

「そんなもの、女房どうして書き合つています平凡な手紙などを御覧になつてもおもしろくも何ともないでしょう」

夫人は騒がぬふうであつた。

「じゃあ見よう。女仲間の手紙にはどんなことが書かれてあるものだろう」

とお言ひになり、あけてお見になると、若々しい字で、

その後お目にかかることもできませんままで年も暮れたのでございました。山里は寂し

ゆうございます。峰もやから靄もやの離れることもありませんで。

などとある奥に、

これを若君に差し上げます。つまらぬものでございますが。

と書いてある。ことに貴女らしいふうも見えぬ手紙ではあるが、心当たりのおありにならぬために、また立文のほうを御覧になると、いかにも女房らしい字で、

新年になりました、そちら様はいかがでいらつしやいますか。御主人様、また皆様も  
 にもお喜びの多い春かと存じ上げます。ここはごりつぱな風流な邸やしきですが、お若い方  
 にふさわしい所とは思われません。つれづれな日ばかりをお送りになりますよりは、時  
 々そちら様へお上がりになって、お気をお晴らしになるのがよろしいと存じ上げるので  
 すが、あのめんどろなことの起こりました日のごことで恐ろしいように懲りておいでにな  
 りまして、あいかわらずめいつたふうでおいでになります。若君様へこちらから卯槌うづちを  
 差し上げられます。そまつな品ですから奥様の御覧にならぬ時に差し上げてくださいと  
 仰せになりました。

こまごまと、年の初めの縁起も忘れて、主人のことを哀訴している、かたくならしい心  
 も見える手紙を、宮は何度となく読んで御覧になり、怪しく思召して、

「もう言ってもいいでしょう、だれの手紙ですか」

と夫人へお言いになった。

「以前あの山荘にいました人の娘が、訳があつてこのごろあそこにいるということを知  
 っていました。それでしよう」

この答えをお聞きになつた宮は、普通の二人の女房が同じ階級の者として一人のここの

言われてある文章でもないし、めんどろが起こつたと書いてあるのは、あの時のことをさして言うに違いないとお悟りになつた。卯槌が美しい細工で作られてあるのは、閑暇ひまの多い人の仕事と見えた。またぶりに山やまたちばな橘たちばなの実を作つてならせてあるのへ付けてあつたのは、

まだふりぬものにはあれど君がため深き心にまつとしらなん

こんな平凡な歌であつたが、常に心にかかつている人の作であるかもしれぬということに興味をお覚えになつた。

「返事を書いてあげなさい。無情じやありませんか。隠す必要もない手紙を私が見ただけなのに、なぜ機嫌きげんを悪くしたのですか、では私はあちらへ行こう」

こんな言葉を残して宮は夫人の居間から出てお行きになつた。中の君は少将などに、

「宮様に見られてしまつて、あの人がかわいそうだったね。小さい子が使いから受け取つたのだらうけれど、だれも気がつかなかつたのかねえ」

ひそかにこんなことを言つていた。

「私どもが気がついておりましたなら、どうして持たせて差し上げなどするものでござい  
ますか、全体この子はあさはかに出過ぎる子でございます。将来のことは子供の時を見て  
よく想像されるものですが、おつとりとしています子には見込みがございますけれど」  
などと憎むのを見て、

「まあそんなに言わないでね。子供に腹をたてるものではない」

と夫人は制した。去年の冬にある人から童女として奉公させた子であるが、顔のきれいな  
ために宮もかわいがっておいでになった。

御自身の居間のほうへおいでになった宮は、不思議なことでないか、あれからのちも宇  
治へ行くことを大将はやめないと聞いていたが、そつと泊まる夜もあると人が言った時に、  
深い恋をした人の面影の残る山荘だからといっても、ああした所に宿泊までするのかと思  
ったのは、こうした新しい情人を隠していたためなのであらうと、思い合わされることも  
おありになつて、学問のほうの用で自邸でもお使いになる大内記が、薫の家の人によるべ  
のあることを思い出しになり、居間へお呼びになつた。韻いんふたぎ塞ふさをされるはずになつて  
いたから、詩集のしかるべきものを選んでここの柵たなへ積んでおくことなどをお命じになつ  
たあとで、

「右大將が宇治へ行かれることは今でも同じかね。寺をりっぱに作ったそうだね。一度見たいものだ」

こんな話をおしかけになった。

「たいへんなものでございます。不断の三昧堂さんまいなどもけっこうな設計でお作らせになったと申すことを聞きました。宇治へおいでになりますことは昨年こぞの秋ごろから以前よりもはげしくなったようでございます。下の者のそつと申しておりますのを聞きますと、愛人を隠しておいておありになるようでございます。かなり大事にしていられる人らしゅうございます。大將のあのへんのあちらこちらの莊園の者が皆仰せで山莊の御用を勤めております。代る代る宿直とくいをおさせになったりもするようです。京のお邸やしきからも、そつと目だたせずに入り用な物品を山莊へ送らせておいでになります。どんな幸運の人が、しかしながら心細い山莊住まいをさせられておいでになるのだろうと、この話を十二月に聞いたと私に話した者は言いました」

と大内記は言つた。すべてがこれで明らかになったと宮はお喜びになった。

「どういふ人と言つていなかつたかね、あの山莊にもとからいる尼のめんどうを大將は見やっていると聞いたが、そのまちがいではないだろうね」

「尼さんは廊の座敷に住んでおります。その方は今度建ちました御殿のほうに、きれいな女房などもたくさん使つて、品よく住んでおいでになるようでございます」

「おもしろい話だね、どういうつもりで、どの婦人をそうして隠しているのだろう。なんといつてもあの人のすることは特色があるね、左大臣などはあの人があまりに宗教に傾き過ぎて、山の寺などに夜さえも泊まることをするのは、身分柄軽率な譏<sup>そし</sup>りを受けることだと非難をしておられると聞いたが、実際は信仰のための微行などというものはできるものではない、やはり昔の恋人の家であるから、それに心が惹<sup>ひ</sup>かれて行くのだと私に言う者もあった。それがまた当を得た解釈ではなかったのだね、愛人を隠してあるなどとは驚くね。君はどう思う。だれよりも自分はまじめな人間であると標<sup>ひょう</sup>榜<sup>ぼう</sup>している人が、そんな常識で想像もできぬようなことを仕組んで愛人をそつと持つなどということは」

と宮はおかしそうに言いになった。大内記は右大将の家に古くから使っている家司<sup>けいし</sup>の婿であつたから秘密な話も耳にはいるのであろう。宮のお心の中では、どんな策を用いてその薫<sup>かわる</sup>の愛人をあの夕べの女であるか、そうでないかと思きわめたらいいであらう、あの大将がそれほど大事にしておく人はひととおりの美人ではあるまい、またその女が自分の妻とどういふ関係で親しいのであろうとお思われになり、薫と心を合わせて夫人があく

まで隠そうとしていることがねたましく、いささか不快なことにもお思われになった。

それ以来 ひょうぶぎょう 兵部卿の宮は宇治の女のことばかりがお思われになった。宮中の賭弓のりゆみ、内宴などが終わるとおひまになつて、一月の除目じもくなどという普通人の夢中になつて奔走してまわることは何のかかわりもお持ちにならないのであるから、微行で宇治へ行つてみることをどう実現さすべきであるかとばかり腐心しておいでになった。大内記は除目に得たい官があつてどうかして宮の御歡心を得ておこうと夜昼心を使つていふころであつたのを、宮はまた好意をお見せになつて、おそばの用に始終お使いになり、ある時、

「どんな困難なことでも私の言うことに骨を折つてくれるだろうか」

とお言いだしになった。内記はかしこまつて頭を下げていた。

「この間の話の大将の宇治に置いてある人ね、それは以前に私の情人だった女で、ある時から行くえ不明になつてゐるのが、大将に愛されてどこかへ囲われているという話をこの間聞いてね、確かにその人かどうかをほかに分明にする手段はないから、あそこへ行つて、ちよつとした隙間すきまからのぞくようにして見定めたいと思うのだ。それを少しも人に気けづかせないでする方法はというふうにすればいいだろう」

宮はこうお言いになるのであつた。めんどうの多い仰せであるとは思うのであるが、

「宇治へおいでになりますのには荒い山越しの路みちを行かねばなりません、距離にいたせばさほど遠いわけではございません。夕方お出ましになれば夜の十時ごろにはお着きになることができましょう。そして夜明けにお帰りになればよろしいでしょう。人に秘密を悟られますのは供の口から洩もれるのが多いのでございますが、それも侍たちの性質などはちよつとわかりかねますから、人選がむずかしいのでございます」

と申した。

「そうだ。宇治へは昔も一、二度行つた経験がある。軽率なことをすると言われることで遠慮がされるのだよ」

とお言いになりながら返す返すもしてよい行動ではないと自身のお心をおさえようとされたのであるが、もうこんなことまで言っておしまひになつたあとではおやめになることができなくなり、お供には昔もよく使ひに行き、宇治の山荘の勝手をよく知つた者二、三人、それから内記、乳母めのとの子で蔵人くらうどから五位になつた若い男と、特に親しい者だけをお選びになり、大將は今日明日宇治へ行くことにはないというころを、薫の家の内部の消息のよくわかる内記に聞いてお置きになつてお出かけになる兵部卿の宮であつたが、覚えのある路みちをおとりになるにつけても昔がお思い出されになり、あやしいまでに何事も打ちあけ

合う友情を持ち、自分を伴って恋人の家へ入れてくれたほどの好意を知らず顔に、その人へ済まぬ心を起こして同じ宇治へ行くと、悩ましい気持ちを覚えておいでになった。京の中でも、浮気うわきな方とは申せ、極端な微行は経験しておいでにならないのであるが、簡単なお身なりをあそばして、大部分はお馬でおいでになることになっていた。お気持ちも無気味で、恐ろしくさえおありになるのであるが、好奇心の人一倍多い方であつたから、山路やまみちを深く進んでおいでになったころには、こうして行ってその人を見ることができたらどんなにうれしいであろう、のぞくだけで自分の行ったことを知らせる方法がなかつたら物足らぬ気がするであろうと思ひになるとまた胸が鳴った。法性寺のあたりまではお車で、それから馬をお用いになつたのである。

急いでおいでになつたため、宮は九時ごろに宇治へお着きになつた。内記は山荘の中のことをよく知つた右大将家の人から聞いていたので、宿直とくのいの侍の詰めているほうへは行かずに、葦垣あしがきで仕切つてある西の庭のほうへそつとまわつて、垣根を少しこわして中へはいつた。聞いただけは知っていたが、まだ来たことのない家であつて、たよらない気はしながら、人の少ない所であるため、庭をまわり、寢殿の南に面した座敷に灯ひのほのかにともり、そこにそよそよと絹の触れ合う音を聞いて行き、宮へそう申し上げた。

「まだ人は起きているようでございます。ここからいらつしやいまし」

と内記は言い、自身の通つた路へ宮をお導きして行つた。静かに縁側へお上がりになり、格子に隙間すきまの見える所へ宮はお寄りになつたが、中の伊予簾いよすだれがさらさらと鳴るのもつましく思おぼしめ召よされた。きれいに新しくされた御殿であるが、さすがに山荘として作られた家であるから、普請ふしんが荒くて、戸に穴の隙すきなどもあつたのを、だれが来てのぞくことがあろうと安心してふさがないでおいたものらしい。几帳きちょうの垂帛たれを上へ掛けて、それがまた横へ押しやられてあつた。灯を明るくともして縫い物をしている女が三、四人いた。美しい童女は糸を縫よっていたが、宮はその顔にお見覚えがあつた。あの夕べの灯影ほかげで御覧になつた者だつたのである。思ひなしでそう見えるのかとお疑われにもなつたが、また右近と  
その時に呼ばれていた若い女房も座に見えた。主君である人の、脇かいなまくらを枕にして灯ひをながめた眼めつき、髪かみのこぼれかかつた額かぶつきが貴女きじよらしく艶えんで、西の対の夫人によく似ていた。宮のお見つけになつた右近は服地に折り目をつけるために身をかがめながら、

「お宅へお帰りになりましたら、早くおもどりになることは容易ではございませんでしょうが、殿様は除目じもくにお携わりになつたあとで、来月の初めには必ずおいでになりますようにと、昨日の使いも申しておりました。お手紙にはどう書いていらつしたのでございます

か」

と言つていたが、姫君は返辞もせず物思わしいふうをしている。

「おいでになります時にわざとおはずしになつたようになりましてもよろしくございませ  
ん」

と、また言うと、それと向き合っている女が、

「そう申し上げてお置きになりませんではいけませんね。お詣りまいをなさいますことをね。

軽々しくそつとお外出をなさいますことも今はもうよろしくないと思ひます。そしてお詣  
りが済めばすぐにおもどりなさいまし。ここは心細いお住居すまいのようですが、氣樂で、のん  
びりとした日送りに馴なれましたから、お宅はかえつて旅の宿のような氣がして苦しゅうご  
ざいませうよ」

とも言う。また一人が、

「まあ自分はお動きにならずに、殿様の思召しのままここでごしんぼうをしていらつしや  
るのがおおようで、お品のいいことではないでしょうか。京へお呼び寄せになりましたあ  
とで穏やかに親御様にもお逢あいあそばすことになさいませよ。ままさんが性せつ急かちですから  
ね、急にお詣りをおさせしてお宅のほうへもお寄りさせようと、こんなことを独ひとりぎめに

きめてお宅へ言つてあげたのがよくないと思います。昔の人だつて今の人だつてもよくしんぼうをして気のゆるやかに持てる人が最後の勝利を占めていると私は思うのですよ」  
 こんなことも言っている。

「どうしてままをここまで来させたのでしょうか。あちらへ置いて来るべき人をね。老人と  
 いうものはよけいなことまでも考え出すものなのに」

右近のにがにがしそうにこう言うのは、乳母というような人の悪口かとも聞こえた。そう  
 うだ、差し出者がいたのだつたとお思ひ出しになる宮は夢を見ている気があそばされた。  
 女たちは聞く者が恥ずかしくなるようなことまで言い合つて、

「二条の院の奥様はほんとうに御幸福な方ね。左大臣様は権力にまかせて大騒ぎになるの  
 だけれど、若様がお生まれになつてからは女によう王様の御寵ちようあい愛が図抜けてきたのですも  
 の。ままのようならささい人がおそばにいないでゆつたりと上品に奥様らしく皆がおさせ  
 しているのがいい効果を見せたのですよ」

「殿様さえ奥様を深くお愛しになれば、こちらもお劣りになるものですか」

こんなことの言われた時、姫君は少し起き上がつて、

「醜いことは言わないでね。よその人には劣らない人になりたいとか何とか思つても、女

王様のことに私などを引き合いに出して言わないでね。もしあちらへ聞こえることがあれば恥ずかしい」

と言った。どんな血族にあたる人なのであろう、よく似た様子をしているではないかと宮は比べてお思ひになるのであつた。氣品があつて艶えんなところはあちらがまさつていた。この人はただ可憐かれんで、こまごまとしたところに美が満ちているのである。たとえ欠点があつても、あれほど興味を持つて捜し当てたいとお希ねがひになつた人であれば、その人をお見つけになつた以上あとへお退ひきになるはずもない御氣性であつて、まして残る隈くまもなく御覧になるのは、まれな美貌びぼうの持ち主なのであつたから、どんなにもしてこれが自分のものになる工夫くふうはないであらうかと無我夢中になつておしまひになつた。物詣ものもでに行く前夜であるらしい、親の家というものもあるらしい、今ここでこの人を得ないでまた逢いうる機会は望めない、実行はもう今夜に限られている、どうすればよいかと宮はお思ひになりながら、なおじつとのぞいておいでになると、右近が、

「眠くなりましたよ。昨晚はどうとう徹夜をしてみましたのですもの、明日早く起きてもこれだけは縫えましよう。どんなに急いでお迎いが京を出て来ましても、八、九時にはなることでしょうか」

と言ひ、皆も縫いさした物をまとめて几帳きちようの上に懸かけたりなどして、そのままそこへうたた寝のふうに横たわつてしまつた。姫君も少し奥のほうへはいつて寝た。右近は北側の室へはいつて行つたがしばらくして出て来た。そして姫君の圍ねやの裾すそのほうで寝た。眠がつていた人たちであつたから、皆すぐに寝入つた様子を見てお置きになつた宮は、そのほかに手段はないことであつたから、そつと今まで立つておいでになつた前の格子をおたたきになつた。右近は聞きつけて、

「だれですか」

と言つた。咳払いをあそばしただけで貴人らしい気配けはいを知り、薫かおるの来たと思つた右近が起きて来た。

「ともかくもこの戸を早く」

とお言いになると、

「思いがけません時間においでになつたものでございますね。もうよほど夜がふけておりましようのに」

右近はこう言つた。

「どこかへ行かれるのだと仲信なかのぶが言つたので、驚いてすぐに出て来たのだが、よくない

ことに出あつたよ。ともかくも早く」

声を薫によく似せてお使いになり、低く言っておいでのなるのであつたから、違つた人であることなどは思いも寄らずに格子をあけ放した。

「道でひどい災難にあつてね、恥ずかしい姿になつてゐる。灯を暗くするように」

とお言いになつたので、右近はあわてて灯を遠くへやつてしまった。

「私を人に見せぬようにしてくれ。私が来たと言つて、寝ている人を起こさないように」

賢い方はもとから少し似たお声をすっかり薫と聞こえるようにしてもものをお言いになり、寢室へおはいりになつた。ひどい災難とお言いになつたのはどんな姿にされておしまひになつたのであろうと右近は同情して、自身も隠れるようにしながらのぞいて見た。繊細ななよなよとした姿は持つておいでになつたし、かんばしいにおいも劣つておいでにならなかつた。嘘うその大將は姫君に近く寄つて上着を脱ぎ捨て、良人おとこらしく横へ寝たのを見て、

「そこではあまりに端近でございます。いつものお床へ」

などと右近は言つたのであるが、何とも答えはなかつた。上へ夜着を掛けて、仮寝をしていた人たちを起こし、皆少し遠くへさがつて寝た。

薫の従者たちはいつでもすぐに莊園のほうへ行つてしまったので、女房などはあまり顔

を知らなんだから、宮のお言葉をそのままに信じて、

「深いお志からの御微行でしたわね。ひどい目におあいになったりあそばしてお気の毒な  
んですのに、お姫様は事情をご存じないようですね」

などと賢がつている女もあつた。

「静かになさいよ。夜は小声の話ほどよけいに目に立つものですよ」

こんなふう仲間注意もされてそのまま寝てしまった。

姫君は夜の男が薫でないことを知つた。あさましさに驚いたが、相手は声も立てさせない。あの二条の院の秋の夕べに人が集まつて来た時でさえ、この人と恋を成り立たせねばならぬと狂おしいほどに思召した方であるから、はげしい愛撫あいぶの力でこの人を意のままにあそばしたことは言うまでもない。初めからこれはちんにゆう闘入者であると知っていたならば今少し抵抗のしかたもあつたのであろうが、こうなれば夢であるような気がするばかりの姫君であつた。女のやや落ち着いたのを御覧になつて、あの秋の夕べの恨めしかつたこと、それ以来今日まで狂おしくあこがれていたことなどをお告げになることによつて、ひょうぶ兵部卿きょうの宮でおありになることを姫君は知つた。いよいよ羞恥しゆうちを覚えて、姉の女王がどうお思ひになるであろうと思ふともうどうしようもなくなつた人はひどく泣いた。宮も今後

会見することは不可能であろうと思召おぼしめされるためにお泣きになるのであった。

夜はずんずんと明けていく。お供の人たちが注意を申し上げるように咳払いなどをする。右近がそれを聞いて用をするためにおいでになる所の近くへ来た。宮は別れて出てお行きになるお気持ちにはなれず、どこまでもお心の惹ひかれるのをお覚えになつたが、そうかといつてこのままでおいでになることもおできにならないことであつた。京で捜されまわるようなことはあつても、今日だけはここに隠れていよう、世間をはばかりということもよく生きようがためである、自分は今別れて行けば死ぬことになるとお心をおきめになつた宮は、右近を近くへお呼びになつて、

「思いやりのないことと思うだろうが、今日は帰りたくない。従者らはここに近いどころかよく人目を避けて時間を送るように。それから時とき方は京へ行つて山寺へ忍んで参籠さんろうしているとお上じょうず手てにとりなしをしておけと言つてくれるがいい」

と仰せられた。右近はあさましきにあきれて、何の気なしに大将であると思ひ、戸をあけてお入れした昨夜の過失を思うと、氣も失うばかりになつたが、しいて冷静になろうとした。もう今になつてはどんなに騒さわぎ立てても効かのないことであつて、しかも御身分に對して失礼である。あの二条の院の短い時間にさえ深い御執心をあそばすふうの見えたのも、

こんなにならねばならぬ二人の宿縁というものであろう、人間のした過失とは言えないことであるとみずから慰めて、

「今日は御自宅のほうからお迎いの車がまいることになっておりますのに、姫君はどうあそばすおつもりでいらつしやるのでございましょう。こういたしました運命の現われにつきましては、私らが何を申すことができましょう。ただこの場合がよろしくございません。今日はお帰りあそばしまして、お志がございましたなら、また別なよい日をお待ちくださいまし」

と申し上げた。世なれたふうに言うものであると思召して、

「自分は長い物思いに頭がぼけているから、人がどんな非難をしてもかまわぬ気になっている。どうしても別れて帰れないのだ。少しでも自重心が残っていれば自分のような身分の者が、これはできることと思うか。どこかへ行く迎えの車が来た時には急に謹慎日になったとも言えないではないか。秘密はだれのためにも護まもらなければならぬと考えるくれ。それよりほかのことは皆自分にできないことなのだよ」

こうお言いになり。この相手から覚えさせられる愛着の強さをみずからお悟りになる宮は、非難も正義も皆お忘れになった。

右近がお帰りを促している人らのほうへ出て行き、宮はこうお言いになると言い、「そんなことはおよろしくないことですということをおあなたがたからまた申し上げてみてください。こうした無理なことを最初仰せになりました時に、あなたがたがそれをお諫めにならなかつたとはどうしたことでしょう。愚かしくどうしてお言葉どおりに御案内しておいでになつたのでしょうか。途中でもここでも失礼なことを申し上げる人間が出て来ましたらどんなことになつたでしょう」

とたしなめた。内記は予想したとおりに事態がめんどうになつたと思ひながら立つていた。

「時方とおつしやるのはどなたですか」

「私です」

大内記時方は笑いながら、

「ひどいお叱りですから恐ろしくて、私でないと言つて逃げ出そうかと思ひました。それは冗談ですが、はじめに申し上げれば、あまりにも恋いこがれておいでになりますお気の毒な宮様をお見上げしては、だれだつて自身のことなどはどうなつてもいいという気になりますよ。宮様のお言いつけはよくわかりました。宿直の人も皆起きましたから」

と言ひ、すぐに去つて行つた。右近は宮がとどまつておいでになるのをどう取り繕えばいいだろうと苦しんだ。起き出して来た女房たちに、

「殿様は理由わけがあつて、今日は絶対にお姿をだれにもお見せになりたくない思召しなんですよ。途中で災難におあいになつたらしい。お召し物などを今夜になつてからそつとお届けさせるようにお供へお命じになるお取り次ぎを今私はしましたよ」

などと言つた。女房の一人が、

「まあこわいこと。木幡山こぼたという所はそんな所ですつてね。いつものように先払いもさせずにお忍びでお出かけになつたからですよ。たいへんなことだったのですね。お気の毒な」と言うのを、

「まあ静かにお言いなさいよ。ここの下の侍衆が聞けば、それからまたどんなことを起こすかしれませんから」

こうまた言う右近の心の中では嘘うそを語るのが恐ろしかった。あやにくにこんな時に大將からの使いが来たなら、家の中の人へどうまた自分は言うべきであらうと右近は思ひ、初瀬はせの観音様、今日一日が無事で過ぎますようにと大願を立てた。石山寺へ参詣さんけいさせようとして母の夫人から迎えがよこされることになつている日なのである。右近をはじめ供を

して行く者は前日から精進しょうじんけつざい齋さいをしていたので、

「では今日はおいでになれなくなつたのですわね。残念なことです  
ね」とも言つていた。

八時ごろになつて格子などを上げ、右近が姫君の居間の用を一人で勤めた。その室の御み簾すを皆下げて、物忌ものいみと書いた紙をつけたりした。母夫人自身も迎えに出て来るかと思ひ、姫君が悪夢を見て、そのために謹慎をしているとその時には言わせるつもりであつた。

寢室へ二人分の洗面せんめん盥だらいの運ばれたというのは普通のことであるが、宮はそんな物にも嫉妬しつとをお覚えになつた。薫が来て、こうした朝の寝起きにこの手盥で顔を洗うのであるうとお思ひになるとにわかには不快におなりになり、

「あなたがお洗ひになつたあとの水で私は洗おう。こちらのは使いたくない」

とお言ひになつた。今まで感情をおさえて冷静なふうを作る薫に馴なれていた姫君は、しばらくでもいっしょにすることができねば死ぬであろうと激情をおおわずお見せになる宮を、熱愛するといふのはこんなことを言うのであらうと思ひのであつたが、奇怪な運命を負つた自分である、このあやまちが外へ知れた時、どんなふうに思われる自分であらうとまず第一に宮の夫人が不快に思ふであらうことを悲しんでいる時、恋人が何人なにびとの娘であ

るのかおわかりにならぬ宮が、

「あなたがだれの子であるかを私の知らないことは返す返すも遺憾だ。ねえ、ありのままに言っておしまいなさいよ。悪い家であつてもそんなことで私の愛が動揺するものでも何でもない。いよいよ愛するようになるでしょう」

とお言いになり、しいて訊きこうとあそぼすのに対しては絶対に口をつぐんでいる姫君が、そのほかのことでは美しい口ぶりで愛嬌あいきようのある返辞などもして、愛を受け入れたふうに見えるのを宮は限りなく可憐かれんにお思いになつた。

九時ごろに石山行きを迎えの人たちが山荘へ着いた。車を二台持つて来たのであつて、例の東国の荒武者が、七、八人、多くの僕しもべを従したがっていた。下品な様子でがやがやと話しながら門をはいつて来たのを、女房らは片腹痛がり、見えぬ所へはいつているように言つてやりなどしていた。右近はどうすればいいことであろう、殿様が来ておいでになると言つても、あれほどの大官が京から離れていることはだれの耳にもはいつていることであろうからと思ひ、他の女房と相談することもせず手紙てがみを常陸夫人ひたちへ書くのであつた。

昨夜からお穢けがれのが起こりまして、お詣まいりがおできになれなくなりましたことで残念おぼしめに思召おもほすのでございましたが、その上昨晩は悪いお夢を御覧になりましたそうです

から、せめて今日一日を謹慎日になさいませと申しあげましたのでお引きこもりになつておられます。返す返すお詣りのやまりましたことを私どもも残り惜しく思つております。何かの暗示でこれはあるいは実行あそばさないほうがよいのかも存ぜられません。

これが済んでから右近は常陸家の人々に食事をさせたりした。弁の尼のほうにもにわかものしみに物忌ものいみになつて出かけぬということをやつた。

平生はつれづれで退屈で、かすんだ山ぎわの空ばかりをながめて時のたつのもどかしがる姫君であるが、時のたち日の暮れていくのを真底からわびしがつておいでになる方のお気持ちおこころが反映して、はかなく日の暮れてしまつた気もした。ただ二人きりでおいでになつて、春の一日の間見ても飽かぬ恋人を宮はながめてお暮らしになつたのである。欠点と思われるところはどこにもない愛あい嬌きょうの多い美貌びぼうで女はあつた。そうは言つても二条の院の女王には劣つているのである。まして派手はでな盛りの花のような六条の夫人に比べてよいほどの容貌ではないが、たぐいもない熱情で愛しておいでになるお心から、まだ過去にも現在にも見たことのないような美人であると宮は思召した。姫君はまた清楚せいそな風采ふうさいの大将おとを良人おとにして、これ以上の美男はこの世にないであろうと信じていたのが、どこもどこもきれいでおありになる宮は、その人にまさつた美貌の方であると思うようになった。

硯すずりを引き寄せて宮は紙へ無駄むだ書きをいろいろとあそばし、上手じょうずな絵などを描かいてお見せになったりするため、若い心はそのほうへ多く傾いていきそうであった。

「逢いに来たくても私の来られない間はこれを見ていらつしやいよ」

とお言いになり、美しい男と女のいつしよにいる絵をお描かきになって、

「いつもこうしていたい」

とお言いになると同時に涙をおこぼしになった。

「長き世をたのめてもなほ悲しきはただ明日知らぬ命なりけり

こんなにまであなたが恋しいことから前途が不安に思われてなりませんよ。意志の通りの行動ができないで、どうして来ようかと苦心を重ねる間に死んでしまいそうな気がします。あの冷淡だったあなたをそのままにしておかずに、どうして捜し出して再会を遂げたのだろう、かえって苦しくなるばかりだったのに」

女は宮が墨をつけてお渡しになった筆で、

心をば歎かざらまし命のみ定めなき世と思はましかば

と書いた。自分の恋の変わることを恐れる心があるらしいと、宮はこれを御覧になっていよいよ可憐にお思われになった。

「どんな人の変わりやすかったのに懲りたのですか」

などとほほえんでお言いになり、薫かおるがいつからここへ伴って来たのかと、その時を聞き出そうとあそばすのを女は苦しがつて、

「私の申せませんことをなぜそんなにしつこくお訊きになりますの」

と恨みを言うのも若々しく見えた。そのうちわかることであろうと思召しながら、直接今この人に言わせて見たいお気持ちになっておいでになるのであった。

夜になってから京へいったんお歸しになった時とき方かたが来て右近に面会した。

「中ちゆうぐう 宮様からもお使いがまいつておりました。左大臣も機嫌きげんを悪くなさいまして、だれにもお行き先をお言いにならぬような微行をなさるのは軽率で、無礼者にどこでお逢いになるかもしれぬことになって、お上かみの耳にはいれば自分の落ち度になるからとやかましくおっしゃいました。東山にえらい上しょうにん 人があるという話をお聞きになって逢いにおい

でになったのですと、私は披露ひろうしておきました」

こう宮へ取り次がせることを述べたあとで、

「女の方は罪の深いものですね。私のようなきまじめな者さえその圈内へお引き入れになつて作り事までお言わせになりますからね」

と時方は右近へ言った。

「上人にしてお置きになったのはよろしゅうございましたわね、あなたの嘘うその罪もそれで消滅することになるでしょう。ほんとうに意外なことを意外な時に宮様は思いつきになったものでございますわね。前からおいでになりたいという思召しを洩もらしてお置きくださいましたら、もつたいない方でいらつしやるのですもの、どうにかいい取り計らいようもありましたのに、御思案の足らない御行動でございましたわね」

右近は礼儀としての好意を表して言った。そして居間のほうへ行き、聞いたとおりを宮へ申し上げた。中宮の御心配あそばされること、左大臣の言葉も道理にお思われになり、

姫君へ、

「私は窮屈そのもののような身の上がわびしくてならない。軽い殿上役人級の地位にしばらく置いてほしい。これからどうすればいいのでしょうか。このうるさいことをはばかって

出て来ないでおられる私とは思われない。大将も聞けばどんなに感情を害することだろう。濃い親戚関係とはいうものの不思議な少年時代から仲よくつきあってきた人に、こうした秘密が知れば恥ずかしいことだろうと思う。それからまた男は身勝手に自己の不誠意は棚へ上げて女の変心したのを責めるものだということから、自身の愛の足りなかつたことは反省せずに、あなたが恨まれることになりはしないかということまで心配されますよ。夢にも人に知られないようにして、ここでない所へあなたをつれて行ってしまおうと私は考えていますよ」

とお言いになった。

次の日もとどまつておいでになることはできなかつたから、帰ろうとあそばすのであつたが、魂は恋人の袖の中にとどめてお置きになるように見えた。せめて明るくならぬうちにとお供の人たちは咳払いをしてお促しするのであつた。

妻戸の所へ女をいっしょにつれておいでになつて、さてそこから別れてお行きになることがおできにならない。

世に知らず惑ふべきかな先に立つ涙も道をかきくらしつつ

女も限りなく別れを悲しんだ。

涙をもほどなき袖そでにせきかねていかに別れをとどむべき身ぞ

風の音も荒くなっていた霜の深い曉に、衣服さえも冷やかな触感を与えたとお覚えになり、宮は馬へお乗りになったものの、何度となく引き返したくおなりになったのを、お供の人がしいて冷酷に心を持ちお馬を急がせてまた歩ませたために、お心でもなく山莊を後ろにあそばすことになった。時方ともう一人の五位が馬の口を取っていたのである。けわしい所を越えてから自身らも馬に乗った。宇治川の汀みぎわの氷を踏み鳴らす馬の足音すらも宮のお心を悲しませた。昔もこの道だけで山踏みをした自分である、不思議な因縁の続く宇治の道ではないかと思おぼしめ召した。

二条の院へお帰りになった兵部卿ひょうぶきょうの宮は、恋人のありかについて夫人があくまでも沈黙を守り続けたのは同情のないことであつたとお恨めしくお思われになる心から、御自身みづかみの居間のほうへおはいりになりお寝やすみになつたが、お寝つきになれなかつたし、お寂し

くはあつたし、お物思いがつのるばかりであるため、結局夫人の所へおいでになることになつた。

何も知らぬふうで中の君はきれいな顔をしていた。まれな美女であると御覧になつた人よりもこれはまた一段まさつた容姿であるとお認めになりながら、夫人の顔からよく似ていた恋人がお思い出されになつた刹那せつなに胸のふさがれた気があそばすのであつたから、深く物思いのある御様子で帳台へはいつてお寝みになろうとした。

伴つてお行きになつた中の君に、

「私は身体からだのぐあいが非常に悪い。これでだめになつてしまふのではないかと心細いのですよ。私は非常にあなたを愛して死んで行つても、死んだあとであなたの心はすぐに変わつてしまい、他の人を愛するようになるのです。人間の一念というものはいつか成就するものだから、あの人だつてそうだ。願いのかなう日があるに違いない」

とお言いになつた。こんな奇怪なことを至極まじめにお言いになるではないかと中の君は思い、

「こうした醜い疑いを持つておいでになることを大将がお聞きになれば、何か中傷をしたかと私の思われますのがあさましゅうございます。薄幸な私はただいじめるために言つて

いらつしやることでも重大なことにように苦しみます」

と言つて、夫人はあちらへ顔を向けた。宮も真剣なふうにおなりになつて、

「いじめるためなどでなく、真底からあなたを恨んでいることが私にあつたらどうしますか。私はあなたのために決して薄情な良人おつとでなかつたはずだ。珍しいとまで世間で言われているくらいですよ。それなのに、あなたはあの人ほどに私を愛していてくれない。それも宿縁によることだろうとは思ふけれど、私に正直なことを言つてくれない点が恨めしくてならない」

と言つておいでになりながら、その宿縁が並み並みでなかつたから思う人に再会するこ  
とができたとお思われになることで涙ぐまれたもう宮であつた。いつものように冗談じょうだん  
混じりのことでなく、どこまでもまじめでおありになるのが気の毒で、どんな噂うわさをお聞き  
になつたのであろうと驚かれる夫人は、返辞もできなくなつてしまつた。初めがあんなこ  
とであつた自分は良人おつとの尊敬に値せぬように思われているのであろう、姉の女王にょおうへの恋  
のために常識も失うばかりであつた人が、導いて結ばせた縁であつて、自分はまた姉の死  
後にまで持たれる誠意に好感を持つようになったことが原因で、愛を失つた妻になつたの  
であろうと過去のことも思われて、いろいろなことが皆悲しくて心をめいらせている中の

君はいよいよ可憐かれんな人に見えた。

あの恋人を発見したとはなおしばらくの間知らせずにおこうとお思いになるために、ほかのことに思わせて宮は怨えんげん言ごを洩もらしておいでのなるのを、中の君はただ薫かおるのことでまじめに恨みを告げておいでになるものと思ひ込み、だれが嘘うそをほんとうらしく言つたのであろうなどと思つていて、無根のことは無根のことであると宮のお認めにならぬ間は、妻としていっしょにいることも恥ちずかしいと考えられた。

御所から中宮のお手紙の使いがまいったと申し上げられた時に、驚いてお起きになつた宮は、まだ解けないお気持ちのまま御自身の室のほうへ行つておしまいになつた。

お手紙の内容は昨日お逢いになれなかつたことで御心配をあそばしたことが言われてあるのであつた。

気分がよろしければおいでなさい。久しくお逢いしないのでいますから。

などと言うものであつたから、御心配をおさせ申すのは苦しいと思召しながら、實際病みす氣らしい御気分であつたためその日は参内されなかつた。高官たちが幾人も伺候したが皆御簾みすの外へまでお來させになつただけであつた。

夕方に源大將が出て來た。こちらへとお言いになつて、御自身のそばへこの時はお迎え

になった。

「御病気でいらせられますそうで、中宮様もお逢いあそばせないのを寂しく思召すふうでございました。どんな御症状ですか」

と薫はお尋ねした。顔を御覧になった時から胸騒ぎのひどくなったため、言葉少なに宮は相手をしておいでになった。僧がかつた人とはいいながらも、人間的な感情を人の学びがたいまでも殺している男ではないか。あれほど可憐な人に寂しい山荘住まいをさせ、日々待ち暮らさせているようなこともこの人にはできるのであるなどと宮はお思いになり、平生はそんな話でない時にさえ、まじめ男であることを薫は標榜ひょうぼうしているが、こんなことがあるのではないかなどと微細なことまでもあげてお責めになる宮でおありになったから、宇治の人を発見された以上は、どんなにそれでおからかいになるかもしれないのに、今日は冗談じょうだんも口へお出しになることはなくて、苦しい御様子が見えるため、

「困ったことでございますね。たいしてお悪いのではなくて、しかも同じような容体の続きますのは悪い兆候でございます。風邪かぜをまずお癒なおしになる必要がございますよ」

などとまじめに見舞いを言いおいて薫は帰った。上品な男である、あの人と自分をどんなふうにあの恋人は比較して見ることでだろうなどと、何事も宇治の人を離れては思うこと

のおできにならない心に宮はなつておいでになつた。

宇治の山莊の人たちは石山詣りも中止になつてつれづれを覚えていた。宮からのお手紙はあらんかぎりの熱情を盛つて長くお書きになつたのが行つた。それを送ることにすら苦心はいつたのである。時方と呼ばれていたあの五位の家来で、何も知らぬ侍を選んでその使いはさせた。右近を以前知っていた人が大将の供をして行つて、話などをした時から、またしきりに好意を運んでくるのであると右近は他の朋輩に言つていた。際限なく嘘を言わねばならぬ右近になつているのである。

二月になつた。逢いたいところがれ続けておいでになる宮でおありになるが宇治へお出かけになることは困難であつた。こう煩悶ばかりをしていては若死にするほかはあるまいと命の心細さまでもそれに添えてお歎かれになつた。

薫は公務の少しひまになつたころ例のように微行で宇治へ出かけた。寺へ行き仏に謁し、誦経をさせ、僧へ物を与えなどして夕方から山莊へはいつた。微行とはいつても、これはしいて人目を避ける必要もないわけで、相当に従者は率いて狩衣姿ではなく、烏帽子直衣姿ではいつて来た時から、洗練された気品はあたりを圧した。姫君は罪を犯した身で薫を迎えることが苦しく天地に恥じられて恐ろしいにもかかわらず、不条理な恋を持つて

接近しておいでのなつた人のことが忘れられない心もあつて、またこの人に貞操な女らしくして逢うことが非常に情けなかつた。自分は今まで愛していた人への情けも皆捨てるほかはない気がする。と宮はお語りになつたのであつたが、そのお言葉どおりに御病氣に託してどちらの夫人の所へもおいでのなることはなくて、おそばで始終修法ばかりを行なわせておいでのなるというそうであるのに、自分が大将と夫婦らしくしていたということをお聞きになればどんなふうにお憎みになるであらうと思われるのも苦しかつた。薫はまた別箇の存在と見えて優美なふうで、ながく来られなかつた言いわけなどをするにも多くの言葉は用いない。恋しい悲しいとひたひたと迫つて言うことはないが、常に逢いがたい人を持つ恋の苦しさを品よく言う効果は、誇張された多くの言葉がもたらすそれにまさつて、心を惹く力ひは強く、女の愛は自然に得られる風格が備わつていた、恋の相手に艶えんな趣を覚えしめることよりも、行く末長く信頼のできる人柄である点で、今一人よりはるかにまさつていた。自分が意外な恋をしていることをこの人が知れば、真心からどんなに歎くことであろう、狂おしいようにも自分を熱愛する人に自分も愛は覚えるが、それはまじめな人間の心とは言えない、軽けい 佻ちやう 至極なことである、この人にうとまれ、捨てられてしまつた時は、どんなに深い傷手いたでを心に受けることであらうなどと煩悶をしている様子も、薫の

目にはしばらくのうちにめざましく心の成長した跡と見える。つれづれな山荘の生活をしていたら、ありとあらゆる物思いは皆覚えるはずであるからとかわいそうであるため、平生よりも熱心に語り慰めるのであった。

「新築させている家がどうやら形にはなりましたよ。この間見に行つたのですが、ここよりは水のある場所に近くて、桜なども相当にあります。三条の宮とも距離は遠くないのです。そこへ来れば毎日でも逢えないことはないのですから、この春のうちに都合さえよければあなたを移そうと思う」

と薫の言うのを聞いていて、隠れてのどかに住む家の用意をさせているとは昨日きのうの宮のお手紙に書かれてあつたことである、大將がこうもきめているのをお知りにならずに今もそんなことを考えておいでになるのかと哀れに思われぬが、たとえそうであつてもこの人からのがれて宮のほうへ行くようなことはなすべきでないと思うとまた面影に宮の顔が見える。自分ながらも悪い心である、こんな心を持たせるようにされたのは恨めしい宮様であるとそれからそれへと思い続けて姫君は泣き出した。

「あなたがこんなふうでなくおおうだつたら、私も心配がなくておられたのですよ。だけれか中傷をした者でもあつたのですか、少しでもあなたをおろそかに思つていけば、こん

なにして逢いに来られる私の身分でも道程みちのりでもないのに」

などと薫は言い、月初めの夕月夜に少し縁へ近い所へ出て横になりながら二人は外を見ていた。薫は昔の人を思い、女は新しい物思いになった恋に苦しみ、双方とも離れ離れのことを考えていた。山のほうは霞がぼんやりと隠していて、寒い洲崎すさきのほうに鷺さぎの立っている姿があたりの景によき調和を見せてい、はるばると長い宇治橋が向こうにはかかり、柴船しばふねが川の上の所々を行きちがって通るのも他と違った感傷的な風景であつたから、見るたびに昔のことが今のようない気がして、この姫君ほどの人でない女にもせよ、いっしょにおれば憐みあわれはわいてくるであらうと思われるのに、まして恋しい人に似たところが多く、かわりとして見てもそう格段な価値の相違もない人が、ようやく思想も成熟してき、都なれていく様子の美しさも時とともに加わる人であるからと薫は満足感に似たものを覚えて相手を見ていたが、女はいろいろな煩悶のために、ともすれば涙のこぼれる様子であるのを大將はなだめかねていた。

「宇治橋の長き契りは朽ちせじをあやぶむ方に心騒ぐな

そのうち私の愛を理解できますよ  
と言った。

絶え間のみ世には危ふき宇治橋を朽ちせぬものとなほたのめとや

と女は言う。

今まで来て逢っていた時よりも別れて行くのがつらく、少しの間でも多くそばにいた  
い気のある薫であったが、世間はいろいろな批評をしたがるものであるから、今まで事も  
なく隠すことのできた愛人との間のことが、今になって暴露することになってはまずい、  
よい時節に公表もできるのを待とうと思ひ夜明けに帰った。

感情の豊かに備わった女になったと薫は宇治の人のことを思い、哀れに思い出されるこ  
とは以前に倍した。

二月の十日に宮中で詩会があつて、ひょうぶぎょう兵部卿の宮もお出になり、右大将もまいつた。

この季節によくかなつた音楽の感じは皆よくて、兵部卿の宮の御美声は人に深い感銘をお  
与えになるものであつて、曲は梅が枝を歌われたのである。何事にも天才を持つておいで

になる方であつたが、よこしまな恋に心を打ち込んでおいでになるだけは罪の深いことである。

にわかには雪が大降りになつて、風もはげしく出てきたので、音楽遊びは予定より早く終わりを告げた。兵部卿の宮の宿直所このいどころに今日の参会者たちは集まつて行き夜の食事をいただいたりしていた。右大將は部下の者か何かに命じることがあつて少し縁側に近い所へ出ていたが、やや深く積もつた雪が星の光にほのめいている夜であつて「春の夜の闇やみはあやなし梅の花色こそ見えね香かやはかくる」薰かおるの身みからこんな気が放たれるような時「衣いかたしきこよひもや」（われを待つらん宇治の橋姫）と口ずさんでいるのがしめやかな世界へ人を誘う力があつた。宇治の橋姫を言っているではないかと、さつきから転うたた寝たねをしておいでになつた宮のお心は騒いだ。深く愛していないことはないらしい、橋姫の一人ひとり臥ねの袖そでを自分だけの思いやるものとしていたが、同じ思いを運ぶ人もあるのかと身に沁しんでお思おもひになつた。わびしいことである、これほどりっぱな男を持つている女が、自分のほうへ多く好意をもつてくれようとは信じられないと、ねたましくもまた思おぼ召しめされた。

雪が高く積もつたこの翌朝、御前へ創作の詩を御持参になる宮のお姿は、今が美しい真盛りの方と見えた。右大將も同じ年ごろであつた。二つ三つ上ではないかと思われるとこ

ろにまた完まいような美があつて、わざと作り出した若い貴人の手本かとも思われる。帝みかどの御婿としてこれほどふさわしい人はないと世人も大将のことを言っていた。学才も高く、政治家としての素養に欠けたところもない人であつた。

各人の詩がどれも講じられ参会者は皆退散した。兵部卿の宮の詩が、ことに傑作であつたと人々の賞しょう讃さんするのにも宮にはうれしいこととお思われにならない。詩作などがどんな氣でできたのであろうとぼんやりしておいでになるのである。薫に宇治の人を思うふうの見えたことで驚かされたようにも思つておいでになるのであつたから、無理な策をあそばして宇治へお出かけになることになつた。

京の中ではあとから来る仲間を待つているほどに消え残つた雪も、山路に深くおはいりになるにしたがつて厚く積もつているのに氣がおつきになつた。平生以上に見わけがたい細路をおいでになるのであつたから、供の人たちも泣き出さんばかりに恐ろしがつていて、山賊の出ることなどをあやぶんでいた。案内役の内記は式部しょう輔ゆうを兼任する官吏であつた。二つとも隆りゅうとした文事の役であるのが、しなれたように袴はかまを高くくり上げたりしてお付きして行くのもおかしかつた。

山荘では宮のほうから出向くからというおしらせを受けていたが、こうした深い雪にそ

れは御実行あそばせないことと思つて氣を許していると、夜がふけてから、右近を呼び出して従者が宮のおいでになつたことを伝えた。うれしいお志であると姫君は感激を覚えていた。右近はこんなことが続出して、行く末はどうおなりになるかと姫君のために苦しくも思うのであるが、こうした夜によくも思う心はこの人にもあつた。お断わりのしようもないとして、自身と同じように姫君から睦まじく思われている若い女房で、少し頭のよい人を一人相談相手にしようとした。

「少しめんどうな問題なのですが、その秘密を私といつしよに姫君のために隠すことに骨を折ってくださいな」

と言つたのであつた。そして二人で宮を姫君の所へ御案内した。途中で濡れておいでになつた宮のお衣服から立つ高いにおいに困るわけであつたが、大将のにおいのように紛らわせた。

夜のうちにお帰りになることは、逢いえぬ悲しさに別れの苦しさを加えるだけのものになるであらうからと思召した宮は、この家にとどまっておいでになる窮屈さもまたおつらくて、時方ときかたに計らわせて、川向いのある家へ恋人を伴って行く用意をさせるために先へそのほうへおやりになつた内記が夜ふけになつてから山莊へ来た。

「すべて整いましてございます」

と時方は取り次がせた。にわかにな何事を起こそうとあそばすのであろうと右近の心は騒いで、不意に眠りからさまされたのもあつたから身体がふるえてならなかつた。子供が雪遊びをしているようにわなわなとふるえていた。どうしてそんなことをと異議を言わせになるひまもお与えにならず宮は姫君を抱いて外へお出になつた。右近はあとを繕うために残り、侍従に供をさせて出した。はかないあぶなつかしいものであると山荘の人が毎日ながめていた小舟へ宮は姫君をお乗せになり、船が岸を離れた時にははるかにも知らぬ世界へ伴つて行かれる氣のした姫君は、心細さに堅くお胸へすがっているのも可憐に宮は思召された。有<sup>ありあけ</sup>明の月が澄んだ空にかかり、水面も曇りなく明るかつた。

「これが橘たちばなの小嶋でございます」

と言ひ、船のしばらくとどめられた所を御覧になると、大きい岩のような形に見えて常と磐木きわぎのおもしろい姿に繁茂した嶋が倒影もつくつていた。

「あれを御覧なさい。川の中にあつてはかなくは見えますが千年の命のある緑が深いではありませんか」

とお言ひになり、

年経ふとも変はらんものか橘の小嶋の崎さきに契るころは

とお告げになった。女も珍しい楽しい路みちのような気がして、

橘の小嶋は色も変はらじをこの浮舟ぞ行くへ知られぬ

こんなお返辞をした。月夜の美と恋人の艶えんな容姿が添って、宇治川にこんな趣があつたかと宮は恍惚こうこつとしておいでになった。

対岸に着いた時、船からお上りになるのに、浮舟うきふねの姫君を人に抱かせることは心苦しくて、宮が御自身でおかかえになり、そしてまた人が横から宮のお身体からだをささえて行くのであつた。見苦しいことをあそばすものである、何人なにびとをこれほどにも大騒ぎあそばすのであろうと従者たちはながめた。

時方の叔父おじの因幡守いなばのかみをしている人の荘園の中に小さい別荘ができていて、それを宮はお用いになるのである。まだよく家の中の装飾などとのついで、網代屏風あじろびょうぶなどと

いう宮はお目にもあそばしたことのないような荒々しい物が立ててある。風を特に防ぐ用をするとも思われない。垣かきのあたりにはむら消えの雪がたまり、今もまた空が曇ってきて小降りに降る雪もある。そのうち日が雲から出て軒の垂氷つららの受ける朝の光とともに人の容よ貌うぼうも皆ひととき美しくなつたように見えた。宮は人目をお避けになるために輕装のお狩衣姿であつた。浮舟の姫君の着ていた上着は抱いておいでになる時お脱がせになつたので、織きやしや細な身体つきが見えて美しかった。自分は繕つくろいようもないこんな姿で、高雅なまぶしいほどの人と向かい合つていのではないかと浮舟は思うのであるが、隠れようもなかつた。少し着馴ならした白い衣服を五枚ばかり重ねているだけであるが、袖口から裾のあたりまで全体が優美に見えた。いろいろな服を多く重ねた人よりも上じょうず手に着こなしていた。宮は御妻妾でもこれほど略装になつていられるのはお見馴れにならないことであつたから、こんなことさえも感じよく美しいとばかりお思われになつた。侍従もきれいな若女房であつた。右近だけでなくこの人にまで自分の秘密を残りなく見られることになつたのを浮舟は苦しく思つた。宮も右近のほかのこの女房のことを、

「何という名かね。自分のことを言うなよ」

と仰せられた。侍従はこれを身に余る喜びとした。別荘守もりの男から主人と思つて大事が

られるために、時方は宮のお座敷には遣戸やりど一重隔まてた室で得意にふるまっていた。声を縮めるようにしてかしくまって話す男に、時方は宮への御遠慮で返辞もよくすることができず心で滑稽こっけいのことだと思っていた。

「恐ろしいような占いを出されたので、京を出て来てここで謹慎をしているのだから、だれも来させてはならないよ」

と内記は命じていた。

だれも来ぬ所で宮はお気楽に浮舟と時をお過ごしになった。この間大將が来た時にもこうしたふうにして逢ったのであろうとお思ひになり、宮は恨みごとをいろいろと仰せられた。夫人の女二にょにの宮を大將がどんなに尊重して暮らしているかというようなこともお聞かせになった。宇治の橋姫を思いやった口ずさみはお伝えにならぬのも利己的だと申さねばならない。時方がお手ちようず水や菓子などを取り次いで持って来るのを御覧になり、

「大事にされているお客の旦那だんな。ここへ来るのを見られるな」

と宮はお言いになった。侍従は若い色めかしい心から、こうした日をおもしろく思い、内記と話をばかりしていた。浮舟の姫君は雪の深く積もった中から自身の住居すまいのほうを望むと、霧の絶え間絶え間から木立ちのほうばかりが見えた。鏡をかけたようにきらきらと

夕日に輝いている山をさして、昨夜の苦しい路みちのことを誇張も加えて宮が語っておいではなつた。

峰みねの雪汀ゆきづらの氷踏こほりみ分けて君にぞ惑ふ道にまどはず

「木幡こぼたの里に馬はあれど」（かちよりぞ来る君を思ひかね）などと、別荘に備えられているそまつな硯すずりなどをお出させになり、無駄むだ書きを宮はしておいではなつた。

降り乱れ汀みぎはに凍る雪よりも中空なかぞらにてぞわれは消ぬべき

とその上へ浮舟は書いた。中空という言葉は一方にも牽引けんいん力のあることを言うのであらうと宮のお恨みになるのを聞いていて、誤解されやすいことを書いたと思ひ、女は恥ずかしくて破つてしまつた。

そうでなくてさえ美しい魅力のある方が、より多く女の心を得ようとしていろいろとお言ひになる言葉も御様子も若い姫君を動かすに十分である。

謹慎日を二日間ということにしておありになったので、あわただしいこともなくゆつくりと暮らしておいでになるうちに相思の情は深くなるばかりであった。右近は例のように姫君のためにその場その場を取り繕い、言い紛らして衣服などを持たせてよこした。次の日は乱れた髪を少し解かさせて、深い紅の上に紅梅色の厚織物などの取り合わせのよい服装を浮舟はしていた。侍従も平常用ふだんの裳もを締めたまま来ていたのが、あとから送ってこられたきれいなものにすべて脱ぎ変えたので、脱いだほうの裳を宮は浮舟にお掛けさせになり手水を使わせておいでになった。女にょいち一の宮みやの女房にこの人を上げたらどんなにお喜びになって大事にされることであろう、大貴族の娘も多く侍しているのであるが、これほどの容貌きりようの人はほかにないであろうと、裳を着けた姿からふとこんなことも宮はお思いになった。見苦しいまでに戯れ暮らしておいでになり、忍んでほかへ隠してしまう計画について繰り返し繰り返し宮はお話しになるのである。それまでに大將が来ても兄弟以上の親しみを持たぬというようなことを誓えとお言いになるのを、女は無理なことであると思ひ、返辞をすることができず、涙までもこぼれてくる様子を御覧になり、自分の目前ですらその人に引かれる心を隠すことができぬかと胸の痛くなるようなねたましさも宮はお覚えになった。恨み言も言い、御自身のお心もちを泣いてお告げになりもしたあとで、第三日め

の未明に北岸の山莊へおもどりになろうとして、例のように抱いて船から姫君をお伴いになるのであったが、

「あなたが深く愛している人も、こんなにまで奉仕はしないでしょう。わかりましたか」とお言いになると、そうであったというように思つて、浮舟がうなずいているのが可憐かれんであつた。右近は妻戸を開いて姫君を中へ迎えた。そのまま別れてお歸りにならねばならぬのも、飽き足らぬ悲しいことに宮は思召した。

こんなお歸りの場合などはやはり二条の院へおはいりになるのが例であつた。宮はそれ以来健康をおそこねになり、召し上がり物などは少しもおとりにならなかつた。日がたつにしたがいお顔色が青んでゆき、お瘦やせになるのを、御所でもその他の所々でも非常に気づかれ、お見舞いの人が多くまいるために人目の隙に宇治へおやりになるお手紙もこまごまとはお書きになれなかつた。

山莊のほうでもあのやかましやの乳母めのとのままが娘の産でしばらくほかへ行つていたのがこのごろは歸つているために、宮のお文ふみを心おきなく読むことはできなくなつた。姫君の寂しい生活も、今後どんなふうになつたか、大將がよき待遇をしようとするかという夢を持つことで母の常陸夫人ひたちも心を慰めていたのであつたが、公然ではないようであるが、近いうちに京

へ迎えることに薫かおるのきめたことで、世間への体裁もよくなるとうれしく思い、新しい女房を捜し始め、童女の見よいのがあると宇治へ送るようにはしていた。浮舟自身もようやく開かれていく光明の運命の見えだしたことで、初めから望んだのはこのほかのことではなかった、この日を待ち続けていたのであると思いつつも、一方で熱情をお寄せになる宮のことを思い出し、愛が足らぬとお恨みになったこと、その時あの時のお言葉と面影が始終つきまとつて離れず、少し眠るとも夢に見る、困ったことであると思つた。

雨が幾日も降り続いたころ、いつそう宇治は通つて行くべくもない世界になつたように宮は思召され、恋しさに堪えられなくおなりになり「たらちねの親のかふこの繭こもごもりいぶせくもあるか妹いもに逢はずて」親の愛護の深いのは苦しいものであると、もつたないことすらお思われになつた。恋の思いを多くの言葉でお書き続けになり、

ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへくるる頃ころのわびしさ

こんな歌もお添えになつた筆まかせの書体もみごとであつた。高い見識があるので

もない若い浮舟はこれにさえ多く動かされ、その人と同じ恋しさも覚えたのであるが、初めに永久の愛の告げられた大将の言葉にはさすがに奥深いものがあり、他に優越した人格の備わっていることなども思われ、異性として親しんだ最初の人であるためか、今も一方へ没頭しきれぬ感情はあつた。自分の醜聞が耳にはいつて、あの人にとまればは生きておられぬ気がする、自分が幸福な女性になることを待ち続ける母も、不行跡な娘であつたと幻滅を覚え、世間体を恥じることであろう、また現在は火の恋をお持ちになる方も、多情なお生まれつきを聞いているのであるから、どうお心が変わるかしのれない、またそうにもならず京のどこかへ隠されて妻妾さいしやうの一人として待遇されることができてくれば二条の院の女にやおう王からどんなに不快に思われることであろう。隠れていてもいつか人に知れるものであるから、あの秋の日暮れ時に一目お逢いしただけの縁でもこうして捜し出される結果を見たように、姉である方に、自分がどうしているか、どんな恋愛からどうなつたかが知れていかなはずはないと、考えをたどつていけば、宮の御手へ将来をゆだねてしまうのは善事を行なうことでない、大将に愛されなくなるほうがどんなに苦痛であるかしれぬと煩悶している時に薫からの使いが山荘へ来た。かわるがわるに二人の男の消息を読むことは気恥ずかしくて、浮

舟はまださつきさつきの宮のほうの長い手紙ばかりを寝ながら見ていると、それと知って侍従と右近は顔を見合わせて、姫君の心はのちの情人に移ったと言わないよういで言いつていた。

「ごもつともですわ。殿様は二人とない美男でいらつしやると思っていましたのは前のことで、宮様はなんと申してもすぐれていらつしやいますもの、お部屋着になつておいでになつた時の愛嬌あいぎょうなどはどうだつたでしょう。私ならその方があれまではげしく思つておいでになるのを見れば黙視もくししていられないでしょう。中ちゆうぐう宮様の女房を志願して、そして始終お逢いのできるようにしますわ」

こう言つているのは侍従である。

「危険な人ね、あなたは。殿様よりすぐれた風采ふうさいの方がどこにあるものですか。お顔はまあともかくも、お氣質きだてなり、御様子なりすばらしいのは殿様ですよ。何にしてもお姫様はどうおなりあそばすかしら」

右近はこう言つていた。今まで一人で苦心くしんをしていた時よりも侍従という仲間が一人できて、嘘うそごとが作りやすくなつていた。あとから来たほうの手紙には、

思いながら行きえないで日を送っています。ときどきはあなたのほうから手紙で私を責

めてくださるほうがうれしい。私の愛は決して浅いものではないのですよ。などと書かれ、端のほうに、

ながめやる遠をちの里人いかならんはれぬながめにかきくらすころ

平生以上にあなたの恋しく思われるころです。

とも書かれてあった。白い色紙を立たて文ぶみにしてあった。文字も織き細やな美しさはないが貴人の書らしかった。宮のお手紙は内容の多いものであったが、小さく結び文にしてあって、どちらにもとりどりの趣があるのである。

「さきのほうのお返事を、だれも見ませんうちにお書きなさいまし」と右近は言ったが、

「宮様へ今日は何も申し上げる気はしない」

と恥じたふうで浮舟うきふねは言い、無駄むだ書きに、

里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住みうき

と書いていた。浮舟は宮の描かいてお置きになった絵をときどき出して見ては泣かれるのであった。こうした関係を長く続けていつてはならないと反省はするが、薫のほうへ引き取られて宮との御縁の絶たれることは悲しく思われてならぬらしい。

かきくらし晴れせぬ峰のあま雲に浮きて世をふる身ともなさばや

こう浮舟が書いてきたのを御覧になり、ひょうぶきょう兵部卿の宮は声をたててお泣きになった。自分ばかりが熱愛しているのではなく、彼女も自分を恋しく思うことがあるのであろうと想像をあそばすと、浮舟の姫君が物思わしそうにしていた面影がお目の前に立って悲しかった。

薫は余裕のある気持ちで浮舟から来た返事を読み、かわいそうにどんなに物思いをしているであろうと恋しく思った。

つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとど水みかさまさりて

という歌を長く手から放たずながめ入っていたのであった。

薫は夫人の宮とお話をしていたついでに、

「無礼だとあなたがお思いにならぬかと不安に思いながら、ずっと以前から愛していましたた女が一人あるのです。京の街まちの中でもない遠い所に置き放しにしてありますために、物思いばかりいたしているふうなのがかわいそうで、町の中へ呼び寄せてやろうと思ひます。少年時代から私は人に違つた心を持つていまして、宗教のほうへはいって一生を送ろうと覚悟していたのですが、あなたと結婚をして今では出家も実行できませんから、そうなつてみますとだれにも隠してあつた人のことも気の毒になりまして罪を作つているように思われるものですから」

と浮舟のことを言い、また、

「あなたのどんなことが私の苦痛になるものかまだ私は知らないのですもの」

宮はこうお言いになつた。

「お上かみへそんなことで私を中傷する人ができないかと心配するのですよ。世間の人はいろいろなことを言いたがるものですからね、けれど今の関係は世間が問題にするにも足りな

いものなのですが」

などと薫は言っていた。

新築させた邸やしきへ浮舟を入れようと思っていたが、そのために家までも作つたと派手はでな取り沙汰ざたなどをされるのは苦しいことであると薫は思い、ひそかに襖からかみ子を張らせなどすることを、人もあろうに内記の妻の親である大蔵の五位へ心安いままに命じたのであったから、時とき方かたから話は皆兵部卿の宮のほうへ聞こえてしまった。

「絵師も大将の御隨身の中にいますものとか、御従属しております人の中とかからお選びになりました、さすがに歴としたお邸やしきの準備を宇治の方のためにさせておいでになります」と申すのをお聞きになつて、いつそう宮はおあせりになり、御自身の乳母めのとが遠国の長官の妻になつて良人おとこの任地へ行つてしまうその家が下京のほうにあるのをお知りになり、

「自分が世間へ知らせずに隠して置きたい女のためにしばらくその家を借りたい」

と御相談になると、女とはどんな人なのであろうと乳母は思ったが、熱心に仰せられることであつたから、お否み申し上げるのもつたいないように思われて承諾した。この家がお見つきりになつたために宮は少し御安心をあそばされた。三月の末日に乳母は家を出るはずであつたから、その日に宇治から恋人を移そうと計画をしておいでになるのであつ

た。こう思っている、秘密に秘密にしてお置きなさいと書いておやりになったのであるが、御自身で宇治へおいでになることは至難のことになっていた。

山荘のほうからも乳母は気のはしこくつく女であるからお迎えすることは不可能であると右近が書いてきた。

薫からは四月十日と移転の日をきめて来た。「誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」とは思われないで、女はいかに進退すべきかに迷い、不安さに母の所へしばらく行くてよく考えを定めればいいであろうと思われたが、少将の妻になつてゐる常陸守ひたちのかみの娘の産期が近づいたため、祈祷きとうとか読経どきよとかをさせるために家のほうは騒いでいて、懸案だった石山詣いしやまもでもできなくなり、母のほうから宇治の山荘へ出て来た。乳母がさつそく出て来て、

「殿様のほうから、女房たちの衣装をこまごまと気をおつけになりましたたくさんな材料をくださいましたから、どうかしてきれいな体裁をととのえたいと思っておりますけれど、私の頭で考えますことではろくなことはできそうにございません」

などと得意そうに語る。母もうれしそうであつた。浮舟の姫君は逃亡というような意外なことを自分が起こして問題になれば、この人たちはどんなにかなしむことであろう。一方の宮はまたどんな深い山へはいろいろとも必ずお捜し出しになり、しまいには自分もあの

方も社会的に葬られる結果になるであろう、自分の手へ来て隠れるようにとは今朝けさも手紙に書いておよこしになったのであるが、どうすればよいのであろうと思ひ、気分までも悪くなり横になつていた。

「どうしてそんなに平生と違つて顔色が悪く、瘦やせておしまいになつたのだろう」

と母は浮舟を見て驚いていた。

「このごろずっとそんなふうでいらつしやいまして、物は召し上がりませんし、お苦しうにばかりしていらつしやるのでございます」

乳母はこう告げた。

「怪しいことね。物もののけ怪か何かが憑ついたのだろうか。あるいはと思ふこともあるけれど、

石山詣まいりの時は穢けがれで延びたのだし」

と言われている時片腹痛さで伏し目になつてゐる姫君だつた。

夜になつて月が明るく出た。川の上の有ありあけ明月夜あきづきのことがまた思ひ出されて、とめどなく涙の流れるのもけしからぬ自分の心であると浮舟は思つた。

母は昔の話などをしていて弁の尼も呼びにやつた。尼は総あげまき角の姫君のことを話し出し、「考え深い方でいらつしやいまして、御兄弟のことをあまりに御心配なさいまして、みす

みず病氣を重くしておしまいになりお亡かくれになったんですよ」

と歎なげいていた。

「生きておいでになりましたら、宮の奥様の所と同じにおつきあいをあそばすことができまして、ただ今まで御苦労の多うございましたのを、お取り返しになれますほどおしあわせにおなりあそばされたのでしょうに」

尼のこの言葉を常陸夫人は喜ばなかった。自分の娘も八の宮の王女である、これから願っていたような幸福の道を進んで行ったならば二人の女王に劣る人とは見えぬはずであるなどという空想をして、

「ずっとこの方では苦勞をし続けてきたのですが、少しそれがゆるんで大將さんのところへ迎えられて行くことになりましたら、ここへ私の出てまいるようなこともあまりできません。まあ今のうちに昔のお話をゆるりとしておくことだと思うのですがね」

などと言っていた。

「私などは縁起でもない恰かつこう好をしてと思ひまして、こちらへ出てまいってこまごまとしたお話を申し上げますのも御遠慮がされて引つ込んでいましたものの、京へ行っておしまいなれば、心細くなることとございましょう。でもね、こうしたお住まいをしていらつ

しやるのは何だかたよりない気のしたものです、私もうれしいことに違いございません。重々しいお身の上のある方がこんなにも御丁寧にしてお迎えになるのは、奥様のお一人と思召すお心がおありになるからだと私へお話のあつたことがございます。将来御不安なことなどは決してございませぬよ」

「まああとのことはわかりませんが、現在はまあこうした御親切をお見せくださるものですから、最初いろいろとお骨を折ってくださいましたあなたの御恩が思われます。宮の奥様はもつたないほどこの方を愛してあげてくださいましたのですが、あちらではめんどろが少し起りかけましてね、ごやつかいにならせてお置きすることもできませんで、行きどころのないような孤独の方になつておいでになつたので私は心配しておりましたがねえ」

尼は笑つて、

「あの宮様は騒がしいくらい御多情な方でね、利巧りこうな若い女房は御奉仕がいたしにくいそうですよ。ほかのことはごりつぱな方なのですがね、そんなことで奥様が無礼だと思ひになることがないかと御心配が絶えないなどと大輔たゆうの娘が話していましたよ」

こう言うのを、女房ですらその遠慮はするのである、まして自分は夫人の妹でないかと

思いながら、横たわつた浮舟は聞いていた。

「まあこわい話ですね。大将さんは内親王様を奥様に持つておいでになりましたも、この方とは縁の遠い奥様ですもの、悪くお思われになつても、よくても、それはどちらでもともつたないことですが思っています。二条の院の奥様に苦勞をおかけ申すようなことをこの方がなさいましたら、私はどんなにこの方がかわいそうでも二度と逢うことはいたしません、他人になりますよ」

母が尼に話すこの言葉で肝も砕かれたように浮舟の姫君は思った。やはり自殺をすることにしよう。このままでは自分の醜聞が広がってしまうに違いない、どんなことが自分のために起こるかもしれないなどと、姫君が胸をおさえて思っている山荘の外には宇治川が恐ろしい水音を響かせて流れて行くのを、常陸夫人は聞いて、

「川といつてもこんなこわい気のするものばかりでもありませんのにね、ひどくすごい所に長く置いておおきになつたのですもの、大将さんが同情して京へ迎えてくださるのこともつともですよ」

そう言う常陸夫人は得意そうであつた。女房たちも川の水勢の荒いことなどを言い合い、

「先日わたしもりも渡守わたしもりの孫の子供が舟の棹さおを差しそこねて落ちてしまつたそうです。人がよく

死ぬ水だそうでございます」

などと言っていた。

浮舟の姫君は今思っているように自分が行くえを不明にして死んでしまえば、親もだれも当分は力を落として悲しがるであろうが、生きていて世間の物笑いに自分がされるようであればその時の悲しみは短時日で済まず永久に続くことであろう、死ぬほうがよいと考えてみると、そのほうには故障があるとは思えず快く決行のできる気になるもののまた悲しくはあつた。母の愛情から出る言葉を寝たようにして聞きながら浮舟は思い乱れていた。いたましいふうに痩せてしまったことを乳母にも言い、適当な祈禱きとうをさせてほしいと言い、祭はらひや祓はらひなどのことについても命じるところがあつた。「恋せじと御手洗川みたらしにせし禊みそぎ神は受けずもなりにけらしな」そんな禊みそぎもさせたい人であるのを知らない人たちがいろいろに言つて騒いでいるのである。

「女房の数が少ないようですね。確かに信用のできる人を捜しておくことですね。見ず知らずの女は当分雇わないことにしなさいよ。りっぱな方の奥様どうしというものは、御本人たちは寛大な態度をとつていらつしやつても、嫉妬しつとはどこにもあるわけですね、お付きの者のことなどからよくないことも起こりますからね、悪いきつかけというようなものを作

らないように女たちには気をおつけなさいよ」

などと、注意のし残しもないように言い置いてから、

「家で寝ている人も気がかりだから」

と言ひ、母の帰ろうとするのを、物思ひの多い心細い浮舟は、もうこれかぎり逢うこともできないで死ぬのかと悲しんだ。

「身体からだの悪い間はお目にかからないでいるのが心細いのですから、私はしばらくでも家のほうへ行きとうございます」

別れにくそうに言うのであつた。

「私もそうさせたいのだけれど、家うちのほうも今は混雑しているのですよ。あなたに付いている人たちもあちらへ移る用意の縫い物などを家ではできませんよ、狭くなつていてね。

『武生たけふの国府こふに』（われはありと親には申したれ）においでになつても、私はそつと行きますよ。つまりぬ身の上ですから、それだけはあなたのために遠慮されますがね」

と母は泣きながら言つていた。

薫かおるからまたも手紙の使いが来た。病氣と聞いて今日はどうかと尋ねて来たのである。

自身で行きたいのですが、いろいろな用が多くて実行もできません。近いうちにあなた

を迎えうることになって、かえって時間のたつことのもどかしさに気のあせるのを覚えます。

こんなことも書かれてあつた。

兵部卿

の宮は昨日の手紙に返事のなかつたことで、

まだ迷っているのですか、「風の靡なびき」（にけりな里の海人の焚たく藻の煙心弱もさに）のたよりなさに以前よりもいつそうぼんやりと物思いを続けています。

などとこのほうは長かつた。この前の前、雨の降つた日に山荘で落ち合つた使いがまたこの日出逢うことになって、大将の隨身は式部少輔しやうぼうの所できどき見かける男が来ているのに不審を覚えて、

「あんたは何の用でたびたびここへ来るのかね」と訊きいた。

「自分の知つた人に用があるもんだから」

「自分の知つた人に艶えんな恰かつこう好の手紙などを渡すのかね。理由わけがありそうだね、隠しているのはどんなことだ」

「真ほん実とうは守かみ（時方は出雲いずものごんのかみ権守でもあつた）さんの手紙を女房へ渡しに来るのさ」

隨身は想像と違つたこの答えをいぶかしく思つたがどちらも山莊を辞して来た。隨身は利巧者であつたから、つれて来ている小侍に、

「あの男のあとを知らぬ顔でつけて行け、どの邸へはいるかよく見て来い」

と命じてやつた。さきの使いは兵部卿の宮のお邸へ行き、式部少輔に返事の手紙を渡していたと小侍は帰つて来て報告した。それほどにしてうかがわれているとも宮のほうの侍は気がつかず、またどんな秘密があることも知らなかつたので近衛の隨身に見あらわされることになつたのである。

隨身は大将の邸へ行き、ちようど出かけようとしている薫に、返事を人から渡させようとした。今日は直衣姿で、六条院へ中宮が帰つておいでになるころであつたから伺候しようとして薫はしていたのである。前駆を勤めさせる者も多く呼んでなかつた。隨身が取り次ぎを頼む人に、

「妙なことがあつたものですから、よく調べてと思ひましてただ今までかかりました」

と言つているのを片耳にはさみながら、乗車するために出て来た薫が、

「何かあつたか」

と聞いた。取り次いだ人もいることであつたから隨身は黙つてかしまつてだけいた。

様子のありそうなことであると見たが薫はこのまま出かけてしまった。

中宮ちゆうぐうがまた少し御病気でおありになるといふことで宮達も皆集まって来ておいでになった。高官たちもたくさんまいっていて騒いでいたがたいしたことはおありにならなかった。内記は太政官の吏員であったから、役向きのことが忙しかったのかおそくなって出て来た。そして宇治の返事の来たのを宮に、台盤所たいばんどころへ来ておいでになって戸口へお呼びになった宮へ差し上げていたのをちようどその時中宮の御前から出て来た大将が何心なく横目に見て、大事な恋人からよこしたものらしい文ふみであるとおかしく思い、ちよつと立ちどまっていた。宮は引きあけて読んでおいでになる、紅の薄うす様に細かく書かれた手紙のようである。文に夢中になっておいでになる時に、左大臣も御前を立てて外のほうへ歩いて来るのを見て、薫は自身の休息室から今出るふうにして大臣の来たことを宮へ御注意するための咳せき払いをした。これで宮がお隠しになったあとへ都合よく大臣は来ることになった。宮は驚いたふうのうしに直衣ひもの紐を掛けておいでになった。薫も兄の大臣の前に膝ひざを折り、「私はもう下がってまいろうと思います。いつもの物もの怪のけは久しく禍わざわいをいたしませんでしたのに恐ろしいことでございます。叡えい山の座主ざすをすぐ呼びにやりましょう」とだけ言い、忙しそうに立つて行った。

夜のふけたころだれも皆六条院から退出した。左大臣は宮をお先立として幾人もの子息の高官、殿上人を率いていて東の御殿へ行つた。右大将はそれに少し遅れて自邸へ帰るのであつた。隨身が告げることのありそうなふうであつたのを怪しく思つていたから、前駆の人たちなどが馬からおりて炬火たいまつに火をつけさせたりしている時に、薫は隨身を近くへ呼んだ。

「さつきの話はどんなことか」

「今朝宇治に出雲いずも権守ごんのかみ時方ときかた朝臣あそんの所におります侍が来ておりまして、紫の薄様に書いて桜の枝につけられました手紙を西の妻戸から女房に渡しているのを見ましてございます。見つけまして何かと聞きただしますと、申すことが作りごとらしいものがございますから、信用はできないと存じまして、小侍をそつとつけてやりますと、兵部卿の宮のお邸へまいり、式部少輔しよぼうにその返事を渡したそうでございます」

と言う。薫は不思議なことであると思ひ、

「その返事をあちらではどんなふうにして出したか」

「それは見なかつたのでございます。別の戸口から出して渡したらしいのでございます。下人から聞きますと赤い色紙のきれいなものだったと申すことです」

この言葉から思い合わせると、宮の見ておいでになった文がそれに相違ないと思つた。そんなにまで苦心をして調べ出して来たのは気のきいた男であると思つたが、人がすでに集まつて来ていたからそれ以上の細かいことは言わずに済ませた。

薫は車で来る途々みちみちの話の思い、恐ろしいほど異性に対しては神経の過敏に働く宮であ

る、どんな機会にあの人のことをお知りになつたのであろう、そしてどうして誘惑をお始めになつたのであろう、あの田舎いなかの宇治に住ませてあれば、そうした危険には隔離されているもののように思い、安心していたのはなんと自分の幼稚な考え方であつたらう、それにしても互いに知らぬ人の愛人と恋愛の遊戯をすることも世間にはあるであらうが、自分と宮とは親友の間柄で、人が怪しむほどにも助けられ、お助けして恋の媒介をすら勤めた自分の愛人を誘惑などあそばされてよいわけはないと思うと不快でならなかつた。西の対の夫人を非常に恋しく思いながら、ある線を越えて行かない自分はりっぱでないか、しかも親密にするのは宮家へはいつてからの夫人としてではない、宮に対してやましい思いをお持ちするのがいやで、恋しい心を抑制しているのは愚かなことであつたかも知れぬ、ずっとこのごろ宮は御病氣のようで始終お見舞いの人々に取り巻かれておいでになりながら、どうして宇治へのお手紙は書かれたのであろう、またどうしてお通いになることがで

きたのであろう、遠くはるかな恋の道ではないか、だれにも想像のつかぬ所へ行つてお泊まりになることがあり、所在を捜されておいでになる時があるという御評判も聞いた、罪な恋におぼれて御煩悶はんもんから名のない病氣におかかりになっているのであろう、昔のことを思い出しても、あの山莊へお通いになることの可能でない間は見てもらえぬほどお氣の毒に思いやつれておいでになったものであると薫は思い、またいろいろと思ひ合わせてみると、女が非常に物思いをしていたこともこの理由があつたことであつたと、一つが明らかになると次々にうなずかれていくことも多くて女がうとましく思われた。完全な人というものは少ないものである、可憐かれんでおおように見えながら媚態びたいの備わつたのが彼女である、宮のお相手には全く似合わしいものであるから、すべて今からお譲りしてしまいたい氣も薫はしたが、正妻として結婚した女にそうした過失をされたというのでなく、今後とも愛人としての彼女を失つてしまつては恋しくなるであらうと、未練らしく思われぬこともなかつた。自分が捨ててしまえば必ず宮はどこかへ呼び寄せてお置きになるであらう、女がどんな不名誉なことにならうとも思ひやりはおできになるまい、今までからそんな人を二、三人も女にょいち一の宮みやの女房に推挙されたことがある、そうした境遇になつた時、自分を見るに忍びないつらさを味わうであらうと思ひ、捨てる氣は起こらないで、どうするつ

もりかも見たく思い、家へ帰った。薫は手紙を宇治へ書いた。

大将は例の隨身を使いを選び、自身で人のない時にそば近くへ呼んだ。

「時方朝臣は今でも仲なかのぶ信の家に通っているか」

「そうでございます」

「宇治へいつもその使いをやるのだね。零落をしていた女だから時方も恋をしていたことがあるかもしれないね」

と歎息をして見せ、

「人に見られないようにして行け、見られれば恥ずかしいよ」

と言った。時方が始終大将のことをいろいろと訊ききたがり、山荘の中のことを聞いていたのは、自身のためでなく他の方のためにしていたことであつたに違いないし、大将もまたそれを隠そうとしていたのであると、物なれた思いやりをして何とも問わず、薫も低い人間にくわしいことは知らせたくないと思つていたのであつた。

山荘では大将家からの使いが平生よりもたびたび来ることでも不安が覚えられる浮舟の君であつた。手紙はただ、

浪なみこゆる頃ころとも知らず末の松まつらんとのみ思ひけるかな

人にこの歌をお話しになつて笑つてはいけませんよ。

と書かれてあるだけであつたが、いぶかしいと思つた瞬間から姫君の胸はふさがつてしまつた。相手の言おうとしていることを知つてゐるような返事を書くことも恥ちずかしく、誤聞であろうと言いわけをするのもやましく思われて、手紙をもとのように巻まき、

どこかほかへのお手紙かと存じます、身体からだを悪くしてしまつて、今日は何も申し上げられませぬ。

と書き添そへて返した。

薫かおるはそれを見て、さすがに才氣の見えることをする、あの人にこんなことができるとは思おもひなかつたと思おもひ、微笑わいごうをしているのは、どこまでも憎にくいというような気にはなつていないからであらう。

正面からではないが薫がほのめかして来たことで浮うきふね舟の煩悶はんもんはまたふえた。とうとう自分は恥ちさらしな女めになつてしまふのであらうといつそう悲かなしがつてゐるところへ右近みぎぢかが

来て、

「殿様のお手紙をなぜお返しになつたのでございますか。縁起の悪いことでございますのに」

と言つた。

「私に理由のわからないことが書かれていたから、持つて行く先をまちがえたのでしようつて書いて」

浮舟から聞くまでもなく、不思議に思つてすでに手紙は使いへ渡す前に右近が読んであつたのである。意地悪な右近ではないか。見たとは姫君へ言わずに、

「あなた様はほんとうにお気の毒でございます。お苦しいのはお三人ともですけれどね。殿様は秘密をお悟りになつたらしゅうございますね」

と言われて、浮舟の顔はさつと赤くなり、ものを言うこともしなかつた。手紙を見たとは思わずに、来た使いなどから薫の様子が伝えられたのであらうと思つても、だれがそう言つていられるかとも問えなかつた。右近と侍従がどう想像しているであらう、恥ずかしいことである、自発的に惹き起こした恋愛問題ではないが、情けない運命であると、横たわつたまま思い沈んでいると、侍従と二人で右近は忠告を試みようとした。

「私の姉は常陸ひたちで二人の情人を持ったのでございます。どの階級にもそうした関係はあるものでございましてね、どちらからも深く思われていたのでございますから、どうすればよいかと迷っているながらも、姉はあとのほうの男を少しよけいに愛していたのですね、それを嫉妬しつとしまして、前の男があとの男を殺してしまったのでございます。そして自身も姉を捨ててしまいました。お館やかたでもよい侍を一人なくしておしまいになったのでございます。殺したほうもよい郎党だったのですがそんな過失をしてしまった男は使われないとお国から逐おわれてしまいました。皆女がよろしくない二心を持ったから起こったことだと言いに なりましてお館の中にも置いていただけなくなりましたので、東国人になってしまいました、ままは今でも恋しがって泣いております。罪の深いことだとこんなことも思われるのでございますよ。悪い話のついでに申すようでございますが、貴族の方でも低い身分の者でも二つに愛を分けて煩悶はんもんをするということは悪いことでございますよ。貴族は命のやり取りなどはなさいませんが、死ぬにもまさった名誉の損というものがあるのですからね。かえって辛つらうございます。ともかくもどちらかお一人にきめておしまいなさいませぬ。宮様も殿様以上に誠意を持っておいでになるのですしたら、それでもよろしいではありませんか。さっぱりとお気持ち清算しておしまいになりました、あまり煩悶はせぬようにな

さいませ。瘦<sup>や</sup>せて病氣にまでなっておいでになつてはつまらないではございませんか。奥様があれほどにもあなた様のことを御心配していらつしやるではありませんか。私の母のままが殿様のほうへおいでになることと思ひ込みまして夢中になつて御用意を申し上げますのを見ますと、それはやめて別の所へ行くとお言いになりますのもつらいことだろうと思います。またままがかわいいそうにも思われます」

と右近が言う横から、侍従が、

「まあそんなこわい気もするほどのことを申し上げないでお置きなさいよ。こうなりましたのも皆宿命というものですよ。ただお心の中で少しでも多く愛のお感じられになる方の方所へお行きになることになさいませ。ほんとうにあの御身分の方があんなにまで思ひ込んだふうでいらつしやつたのですもの、お引越しの御用意だと言って皆が騒いでいます仕事を私はいつしよにする気もしないのですよ。しばらくは隠れたままのことにしてお置きになりましても、お心のお惹<sup>ひ</sup>かれになる方に一生をお託しあそばすのがいいと私は思ひます」

と宮の御美貌<sup>びぼう</sup>を愛する心から片寄つた進言をする。

「なにも私はぜひ大将様のほうにと言うのではありません、どちらでもよろしゅうござい

ますから、事が起こらずにこの問題が解決されますようにと、はせ初瀬、石山の観音様にも願を立てているのです。大将様の御荘園の御用をしていますのは皆武力を持った荒い人たちで、仲間が無数に宇治にいますからね、この山城、大和の殿様の領地というものは皆この内舎人うちとねりといわれている人に縁故を持った人が支配しています。内舎人の婿の右近の大夫たゆうというのが党主のようになっていろいろのことをきめるようですよ。貴族どうしは同情のないことを相手にさせようとは思っていらつしやらないでしょうが、思いやりのないこの辺の田舎侍いなかざむらひがかわるがわる宿直とのいに来ていますから、自身の当番の時におちどのないようと思ひまして、どんな失礼なしぐさを宮様の御微行にしかけるかわかりません。せんだつての時のことなどほんとうに今思つてもこわいようでございます。宮様のほうでは人目を思召してお付きもたくさんおつれにならないで、だれかわからぬようにしていらつしやいますから、あの荒男どもがお見つけしましたらどんなことが起こりますかと心配ばかりいたしました」

浮舟の姫君は、自分が宮に多く心を惹かれてひいるときめてこの人たちのいつているのを聞くのも恥ずかしい、自分はどちらをどうとも判断もできないのに苦しんでいるのである、夢の中のようにすべ術を知らないのである、はげしく自分をお思ひになる方に対しては、

なぜこうまでも感激はしているが、良人おっとと思い、月日の長く積もった人から離れてしまおうとは思えないためにこんな煩悶がされるのである、右近が言ったように、これから表面に出て悪いことが起こってくればどうしようとするかとつくづくと思ひ沈んでいた。

「私はどうしてでも死にたい、人並みでない情けない私になったのだもの、こんな情けないことは低い身分の人たちにだつてたくさんないはずね」

こう言つて姫君はうつ伏しになつて泣く。

「そんなに御心配をなさるものではありません。お心を少しでも楽にお持ちあそばさようと思つて申し上げたことをごさいますよ。お心に苦しいことがありましてもお氣にとめておいであそばさないようにおおようにしておいでになりましたあなた様が、この問題が起りました時からいらいらとなさいますふうの見えますのはどうしたことでしよう」

とも右近はなだめていた。この人たちも思ひ乱れているのである。乳母は得意になつて染めたり裁つたりしていた。新しく来た童女のかわいい顔をしたのを姫君のそばへ呼んで、「まあこんな人でもお慰めに御覧なさいましょ。いつもお気分がすぐれないようにお寝やすみになつていらつしやるのは物もののけ怪などがおしあわせの道を妨げようとするのかもしれないませんね」

と言いながらも歎いていた。

大将からはあの返した手紙に対して言ってくることもなくそのまま幾日かたった。右近が姫君をおどすために話した内舎人という者が山莊へ現われて来た。噂どおりうわさに荒々しい武骨なふうの老人が、声まで宇治の内舎人らしいこわい声で、

「もののわかる女房衆にお話がしたい」

と取り次がせたために、右近が出て行った。

「殿様からお召しがありましたので、今朝から京へまいって今が帰りです。いろいろと御用を仰せつけられましたついでに、こうしてここに奥様をお置きになっていらつしやつて、夜中でも夜明けでも御用には私らが宇治にいるのであるからと思召して、京のお邸から宿直の侍などはおよこしにならなかつたところが、このごろになって、こちらの女房衆の所へよその人が通つて来る話を聞いた、不届きだ、宿直に行っている者は出入りの人の名を聞いたはずだ、知らないで門を通すはずはないではないか、何という人が来たのかとお尋ねになつたのですが、私は何も承知しないことですから、私は重い病氣をしておりまして、そんなことのありましたのも、来た人はだれかということも存じません。ただしお役にたつような男はわかるがわる差し上げてあるのですから、ただ今お話のようなとんで

もない事件がありますれば私の耳にはいつていぬはずはございませんとお取り次ぎをもつて申していただいて来ました。気をつけて別荘を守れ、悪いことが起これば重い罰を加えるからという仰せがあつたので、どんな罰にあうのかと恐れていますよ」

これを聞いていて右近は、梟ふくろうの啼き声を聞くより恐ろしく感じた。答えもできず内舎人を帰したあとで、

「とうとうこんなことになりました。私が申し立てたとおりのことをお聞きになることになりました。大將様はあの秘密を皆お知りになったのですよ。お手紙もあれからまいりませんね」

などと姫君に言つて歎息をした。乳母は内舎人の話を少し聞いていて、

「よく御注意をしてくださいましたわね。盗ぬす人などの多い土地だのに宿直の人だつて初めほど頼もしい人は来ていなかったのですからね、代役だと言つて下つぱの者をよこすようになつて、その人たちというものは夜まわりをすらしらないのですから」

と喜んでいた。浮舟はこうして寂しい運命のきわまつていくことを感じている時、宮から決心ができたはずであるとお言いになり、「君に逢はんその日はいつぞ松の木の苔こけの乱れてものをこそ思へ」というようなことばかり書いておいでになつた。どちらへ行つても

残る一人に障<sup>さわ</sup>りのないことは望めない、自分の命だけを捨てるのが穏やかな解決法である、昔は恋を寄せてくる二人の男の優劣のなさに思い迷っただけでも身を投げた人もあったのである、生きておれば必ず情けないことにあわねばならぬ自分の命などは惜しくもない、母もしばらくは歎くであろうが、おおせいの子の世話をすることで自然に自分の死のことは忘れてしまふであろう、生きていて身をあやまり、ちようしよう嘲笑を浴びる人になつてしまふのは、母のためには自分の死んだよりも苦しいことに違いないと浮舟は死のほうへ心をきめていった。子供らしくおおうで、なよなよと柔らかな姫君と見えるが、人生の意義というものを悟るだけの学識も与えられずに成長した人であるから自殺というような思いきつたこともする気になつたらしい。あとで人の迷惑になりそうな反古類<sup>ほご</sup>を破つて、一度には処分せずある物は焼き、また水へ投げ入れさせなどしておいおいに皆なくしていった。秘密の片端も知らぬ女房などは、ほかへ移転をされるのであるから、つれづれな日送りをしておいでになる間にたまった手習いの紙などを破つてしまふのであらうと思つていた。侍従などの見つける時には、

「なぜそんなことをなさいますか。思い合つた中でお取りかわしになつたお手紙は、人にはお見せになるものではありませんでも、箱の底へでもしまつてお置きになりまして、時

々出して御覧になりますのが、どの女性にも共通した楽しいことになっておりますよ。この上もないお紙をお使いになりました、美しい御文章でおしたためになったものを、そんなに皆お破りになりますのは情けないことではございませんか」

こんなふうに言つてとめる。

「いいのよ。私にはもう長い命はないようだからね。あとへ残つてはお書きになった方の迷惑にもなつて気の毒よ。悪い趣味だ、愛人の手紙などをしまつておくなどとまたお思いになる方があつても恥ずかしいしね」

などと浮舟は言うのであつた。死というものの心細い本質を思つてはまだ自殺の決行はできないらしいのもつともである。親よりも先に死んで行く人は罪が深くなるそうであるがなどとさすがに仏教の教理も聞いていて思いもするのである。

二十日過ぎにもなつた。宮が交渉しておありになつた家の住み主が二十八日に家をあけて立つことになつていて、

その二十八日の夜に必ず迎えに行きます。下人などに出かけるのを悟らせぬように気をおつけなさい。自分のほうから秘密のもれるようなことは絶対にありません。疑いを持たずにいてください。

というようなお手紙が来た。そうした無理な工作をしておいになっても、もう一度お話をすることすら不可能でそのままお帰しすることになるのは悲しい。またどんな短時間でもこの家へお入れすることはできるものではないと思う。浮舟うきふねが失望して自身を恨みながらお帰りになる様子を想像すると、常に去らない幻がまたありありと見えて、悲しかった。宮のお手紙を顔に押しあててしばらくは忍んで泣いていたが、そのうち声にも出してひどく泣いた。右近が、

「お姫様はこんなふうにしていらつしやいますと人が皆悟ってしまいます。近ごろは不審を起こしかけた人たちもあるようでございます。こんなの一つのことを断ち切れない御心配になさいませんで、宮様へは御同意なさいましたことを書いておあげなさいませよ。私がおります以上、どんな大それたことでもございましたも取り繕いまして、こんなお小さいお身体からだ一つは空からでもおつれ出いたします」

と云うのを聞いて、

「そんなふうには私の心を解釈されるのが苦しい。そうしたいと私が望んでいるのならそれでいいけれど、してはならないことだと、どんなことも皆私は否定しているのに、このお手紙のように信じていらつしやるのかと思うと、あの方はこれからのちにまたどんなこと

をあそばすだろうと不安でならなくて、私は今運命を悲しんでいるのよ」

と浮舟は言い、お返事は書かなかつた。

ひょうぶきよ

兵部卿の宮は出奔してくることを浮舟が受諾して来ないし、返事さえ一つ一つは書いてよこさなくなつたのは、大將が上手じょうずに、その人をなだめてしまい、自分へ来るより安定のありそうな境遇を選ばせることにしたのであろう、それは道理でもあると思召すのであつたが、御自身としては残念でねたましく、今の態度はこうであつても、確かに自分をあの人へ愛していたのだ、逢わないうちに周囲の者からよけいな忠告をされて、そのほうへ心が傾いたのであろうと物思ひをしておいでになると、「わが恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれども行き方のなき」というふうにもなつていくため、例の無理をあそばして宇治へおいでになつた。

あしがき

蘆垣のところへ近づいておいでになると、これまでとは変わり、

「そこへ来るのはだれだ」

と緊張した声でとがめる者が幾人もあつた。そこからやや遠ざかつておいでになり、行きなれた侍だけをおやりになつたが、それをさえ誰すいか何した。以前の様子と変わったことをめんどうに思い、

「京から急用のお手紙を持って来たのです」

と侍は言った。右近の使っている侍の名を言って呼んでもらった。右近はこの上にもまた難儀なことが起こつてくると思つた。

「どうしても今夜はだめでございます。非常に恐縮しておりますが」

と宮へ申し上げさせた。宮はどうしてこんな冷淡な取り扱いをするのであらうと、途方にくれたように思召して、

「ともかくも時とき方かたが行つて、侍従を呼び出して都合をつけさせてくれ」

とお言いになり、内記をまたおやりになつた。時方は才子であつたから上手に宇治侍を欺あざむいて、侍従を呼び、話すことができた。

「どうしたのでしょうか、大將様から仰せがあつたのだと言ひまして、宿直とのいする人が出過ぎたことばかりを言うようになりまして困ります。お姫様がめいつてばかりいらつしやいますのは、宮様の思召しにお報いになることがおできになりませんからかとお氣の毒に拝見いたしております。ことに今夜はあの人らが嚴重に見張つておりますから、お逢いにいらつしやいましてはかえつて悪いことになりそうでございます。またおよろしい日においでくださいますことを、前に知らせてお置きくださいませましたら私ども秘密になんとかいた

して都合をつけます」

と侍従は言い、乳母めのとが寝敏いざといことも語った。時方は、

「並みたいていの道をおいでになったのではありませんからね、よくよくお逢いになりたい御様子なんですから、失望をおさせいたすようなお返辞はもつたいたなくて私からできません。それではあなたがそこまで来てくださって、私も言葉を添えますが、あなたからお断わりを申し上げるようになしてください」

と言つて、誘い出そうとした。それは無理である、ぜひそうしてと言いつているうちにも夜もずつとふけてきた。

馬上の宮は少し遠くへ立つておいでになるのであつたが、田舎風いなかふうな犬が集まつて来て吠え散らす。恐ろしい気がしてお供の少ない軽いお出歩きであつたから、無法者が走つて出て来たならどう防いでよいかなどと、四、五人の者は心配していた。

「どうしても来てくださることですよ。早く、早く」

とせきたてて時方は侍従をつれて来るのであつた。髪を右の脇わきから前へ曲げて持つている侍従は美しい女房であつた。馬に乗せようとするが承知しないために、衣服の裾すそを時方は持つてやりながら歩かせて行くのである。自身の脊くっを侍従にはかせて、内記は供男の草わ

鞋らじのようなものを借りてつけた。

宮のおそばへまいって山荘の事情をお話し申し上げ、侍従を伴って来たことをお知らせしたが、お話しになる場所というようなものもなくて、田舎家の垣根かきねの雑草の中にあふりというものを敷いて、そこへ宮をおおろした。宮もこんな所で災さい厄やくにあつて終わる運命で自分はあるのかもしれないとお思われになり非常にお泣きになった。心の弱い者はましてきわめて悲しいことであるとお見上げしていた。どんな仇きゆうてき敵てきでも、鬼であつても、そこなえまいと見える美貌びぼうをお持ちになるはずである。しばらく躊躇ちゆうちよ躊躇ちよをあそばしてから、

「ちよつとひと言だけ話をすることもできないのだろうか。どうして今になってそんなに嚴重に見張るのだろうか。そばの者がどんなことを言つてあの方の自由意志を曲げさせたのか」

と侍従へ仰せられた。山荘内のことをくわしく申し上げて、

「またおいでの思召しのございます前からおっしゃつてくださいます、私どもにできませうことをさせていただきます。こんなもつたいない御様子を拝見いたします以上、私は自分を喜んで犠牲にもいたしまして、よろしい計らいをいたします」

と侍従は申した。御自身も人目をはばかっておいでになるのであるから、恋人をだけお恨みになることもおできにならなかつた。

夜はふけにふけてゆく。初めから吠えかかつた犬はそれなりも声も休めずに騒ながしく啼なく。従者がそれを追いかけてようとすると、山荘のほうでは弓の弦つるを鳴らし、荒武者の声で「火の用心」などと呼ぶ。落ち着かぬお心から帰ろうとあそばしながらも、宮のお心は非常に悲しかつた。

「いづくにか身をば捨てんとしら雲のかからぬ山もなく泣くぞ行く

ではもう別れて行こう」

とお言いになり、侍従をお帰しになった。宮の御様子は艶えんで、夜中の霧に湿つたお召し物から立つ香はたとえようもなく感じのいいものであつた。

侍従は泣く泣く帰つて来た。右近が宮のおいでをお断わり申し上げたことを言つてから浮舟はいよいよ煩悶を深くして寝ていたが、侍従のはいつて来て、外での様子を話すのに対して返辞はしないながら枕まくらも浮き上がらんばかりの涙の出るのを、この人がどう思ふか

とまた恥じられもした。

翌朝も泣きはらした目を思うと浮舟は起きるのがつらくていつまでも寝ていた。

起きてからははかなそうな姿で、しかも仏へ敬意を表する型として帯の端を肩から後ろ向きに掛けなどしながら浮舟の姫君は経を読んでいた。親よりも先に死ぬ罪が許されたいためである。宮のお描かきになった絵を出してながめているうちに、その時の手つき、美しかったお顔などがまだ近い所にあるように見えてくる。そんなにも心から離れない方であるから、最後にひと言のお話もできなかつた昨夜のことは悲しくてならないはずである。初めから同じように永久愛して変わるまいと言っていた大将も、自分が死んだあとではどんなに歎くことであろうと思ひ、その人への恋を忘れて心の変わつたために死んだと自殺後に言う人もあろうことの想像されるのも恥ずかしかつたが、軽薄な女と思われ、宮のほうへ奔はしつたと大将に思われるよりはまだそのほうがいいと思ひ続けて、

歎きわび身をば捨つとも亡なきかけに浮き名流さんことをこそ思へ

と詠よまれもした。母も恋しかつた。平生は思ひ出すこともない異父の弟妹の醜い顔をし

た人たちも恋しかった。二条の院の女王にようおうを思い出してみても、恋しい。またそのほかにももう一度だけ逢いたいと思われのが多い。女房たちは皆晴れと思う移転の時の用に物を染めたり、縫い物をしたり、何やかやとそうしたことについて話し合っているが浮舟は耳に聞こうともしない。夜になると人に見つけられずに家を出て行くのはどこをどうして行けばいいかという計画ばかりされて眠れぬために気分も悪く、病人のようになっている浮舟であった。朝になれば川のほうをながめながら「羊の歩み」よりも早く死期の近づいてくることが悲しまれた。

宮からは悲しかった夜のことをお言いになり激情にあふれたお手紙を贈られた。死期に人の見るかもしれぬものであるからと思うと、このお返事にも浮舟は思うだけのことを書かなかった。

からをだにうき世の中にとどめずばいづくをはかと君も恨みん

とだけ書いて出した。

姫君は大将へも遺書としてのもを書きおきたく思ったが、あちらへもそちらへも書

いておいて、親友でおありになる人たちの話に上ることがあれば、情操のないことと思われるかもしれぬ、臙おぼろにぼかしておいて、どうなったかわからぬように自分の消えてしまうのがいいのであると思ひ返した。

京の使いが母の手紙を持って来た。

昨夜の悪夢の中であなたを見たものですから、ほうぼうの寺へ誦ずき経を頼みました。その夢のあとは眠られなかつたものですから、今日また昼寝をしました夢に、人が大不吉だという夢の中でまたあなたを見たのです。驚きながらこの手紙を書きます。謹慎日はよく謹慎してお暮らしなさい。寂しいそのお家うちへ時々おいでになります大將の關係から、どんな呪のろいを受けておいでになるかわからないのには病氣だし、ちようどこんな時に悪夢が続くので心配しています。私が行きたいのだけれど、少將の妻の産前の容体が不安で、物怪風もののけふうに煩わづらつていますから、しばらくでもそばを離れますことは主人がやましましたため出かけられませぬ。その近くの寺へも誦経を頼みなさい。

と書いて、寺へ納めるべき物、寺への依頼状も添えて持たせて来たのであつた。

もう死ぬ覺悟をしている自分とも知らずに、こんなに心をつかつているかと浮舟うきふねは母の愛を悲しく思つた。寺へその使いをやつた間に、母への返事を姫君は書くのであつた。

言いたいことは多かつたが気恥ずかしくて、ただ、

のちにまた逢ひ見んことを思はなんこのよの夢に心まどはで

とだけ書いた。誦經の初めの鐘の音が川風に混じって聞こえてくるのをつくづくと聞いて浮舟は寝ていた。

鐘の音の絶ゆる響きに音を添へてわが世尽きぬと君に伝へよ

これは寺から使いがもらつて来た経巻へ書きつけた歌であるが、使いは朝になつてから帰るというために木の枝へ結びつけて渡すようにしておいた。乳母が、

「何だか胸騒ぎがしてならない。奥様も悪夢をたくさん見ると書いておよこしになつたのだから、宿直とのいの人によく気をつけるように言いなさい」

と言っているのを、今夜脱出して川へ行こうとする浮舟は迷惑に思つて聞いていた。

「お食事の進みませんのはどうしたことでしょう。お湯漬ゆづけでもちよつと召し上がつてご

らんになりませんか」

などと世話をやくのを、利巧りこうぶつても老人ふうになつてしまったこの女は、自分が死んでしまえばどこへ行くであろうと、そんなことも想像して浮舟は悲しかった。もう寿命とは別にこの世から消えて行こうと思つていとほのめかして乳母に言おうとすると、まず自分自身が驚かされて涙の流れるのを隠そうとすれば、それでもものが言えなかった。右近が近くへ来て、寝仕度ねしたくをしながら、

「あんまり物思いをあそばすと、物思いする魂は身体からだを離れてしまいますから、奥様へも悪い夢になつて現われるのでございましょう。どちらか一方へお心をお集めになつて、どうにでも成り行きにおまかせなさいませ」

と歎息もしつつ告げた。

柔らかい着物を顔に押し当てようにして浮舟の姫君は寝たそうである。

# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※「宇治橋の長き契りは朽ちせじをあやぶむ方に心騒ぐな」の歌の前には、底本ではカギ括弧が二つありましたが、一つにしました。

※「薫《かおる》からまたも手紙の使いが来た。病氣と聞いて今日はどうかと尋ねて来たのである。」は底本では、2字下げになっていますが、地の文と判断し、字下げ処理は入れませんでした。

※「自身で行きたいのですが、いろいろな用が多くて実行もできません。近いうちにあなただを迎えうることになって、かえって時間のたつことのもどかしさに気のあせるのを覚えます。」の冒頭は2字下げになっていますが、他の手紙文に合わせて全体を1字下げとしました。

※「蘆垣」と「葦垣」、「式部一少輔《しようゆう》」と「式部一少輔《しよう》」の混

在は底本通りにしました。

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2005年2月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 浮舟

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>